

自然



災異



文化



人々



祈り



もっともっと!!

かいじあむ



ぷらす

展示解説
リーフレット

開催期間
2020年(令和2)
6/17水→9/7月

山梨県立博物館
Yamanashi Prefectural Museum



常設展拡大展示

かい
い
じ
あ
む
+

ぷらす

展示解説リーフレット



山梨県立博物館
Yamanashi Prefectural Museum

ご観覧のみなさまへ

このたびは山梨県立博物館にご来館いただき、誠にありがとうございます。

現在、世界中を新型コロナウイルスの感染の脅威が覆い、その終息への道のりは未だ見通せないなかではありますが、多くの医療従事者の皆さまをはじめ、人々の健康と命を守るために尽力されている方々に対して、心から感謝の意を表したいと思います。

山梨県立博物館におきましては、約3ヶ月の臨時休館を余儀なくされましたが、いわゆる「三密」の回避などの感染リスク対策を実施したうえで、再び館の扉を開くことができました。お迎えする設備もスタッフも、利用する皆さまとの交流は最小限とせざるを得ないなかではあります。このような時に博物館だからこそ出来ることを準備し、未曾有の危機を乗り越えるための、精神的な糧をご用意していきたいと思っています。従来の常設展示につきましては、利用者の皆様に五感をもって楽しめる工夫をご用意しており、それが当館の特徴でもありましたが、感染防止の観点から、一部の展示の使用を控えることとしております。

そこで、利用者の皆さまに山梨の豊かな歴史や文化への理解を深めていただくために、「かいじあむ+（プラス）」と題して、日ごろの常設展示を拡大してご紹介することといたしました。いつもの県立博物館とは少し違う切り口や、これまでお目に掛ける機会が少なかった歴史資料や美術作品などを通じて、この山梨の歴史や文化を楽しんでいただきたいと考えております。

いま、私たちが直面している危機は、まだどのように終わりを迎えるのかはわかりません。しかし、これは長い歴史のなかで、先人たちもまた幾度も向き合い、乗り越えて来た試練だともいえます。本展を通じて、私たちがこの危機を乗り越えるための知恵や、支え合って耐え抜いていくための勇気を得ただければ幸いです。

令和2年6月

山梨県立博物館

館長 守屋 正彦

目次

ご観覧のみなさまへ	2
目次・凡例	3
かいじあむ十(ぷらす) 展示室案内図	4
導入展示 …… 御坂のニホンオオカミ	5
その① …… いのちの歴史との対話 — 山梨県立博物館の自然史資料 —	6
その② …… 文化のはじまり — 館蔵考古関係資料から —	8
その③ …… 山梨の宝 甲州文庫	12
その④ …… 絵画から見えてくるもの — 大木家伝来の襖と浮世絵に見る厄災 —	18
その⑤ …… エア甲州道中旅行	22
その⑥ …… 近世甲斐国の書蹟	28
その⑦ …… 山梨流 災いの防ぎ方	30
その⑧ …… 危機のなかの山梨	32
その⑨ …… 毎日に微笑みを	36
展示資料リスト	38

凡例

・本書は令和2年(2020)6月17日(水)から同年9月7日(月)まで開催の常設拡大展示「かいじあむ十(ぷらす)」の展示解説リーフレットである。

・本書の執筆・編集分担は次のとおりである。

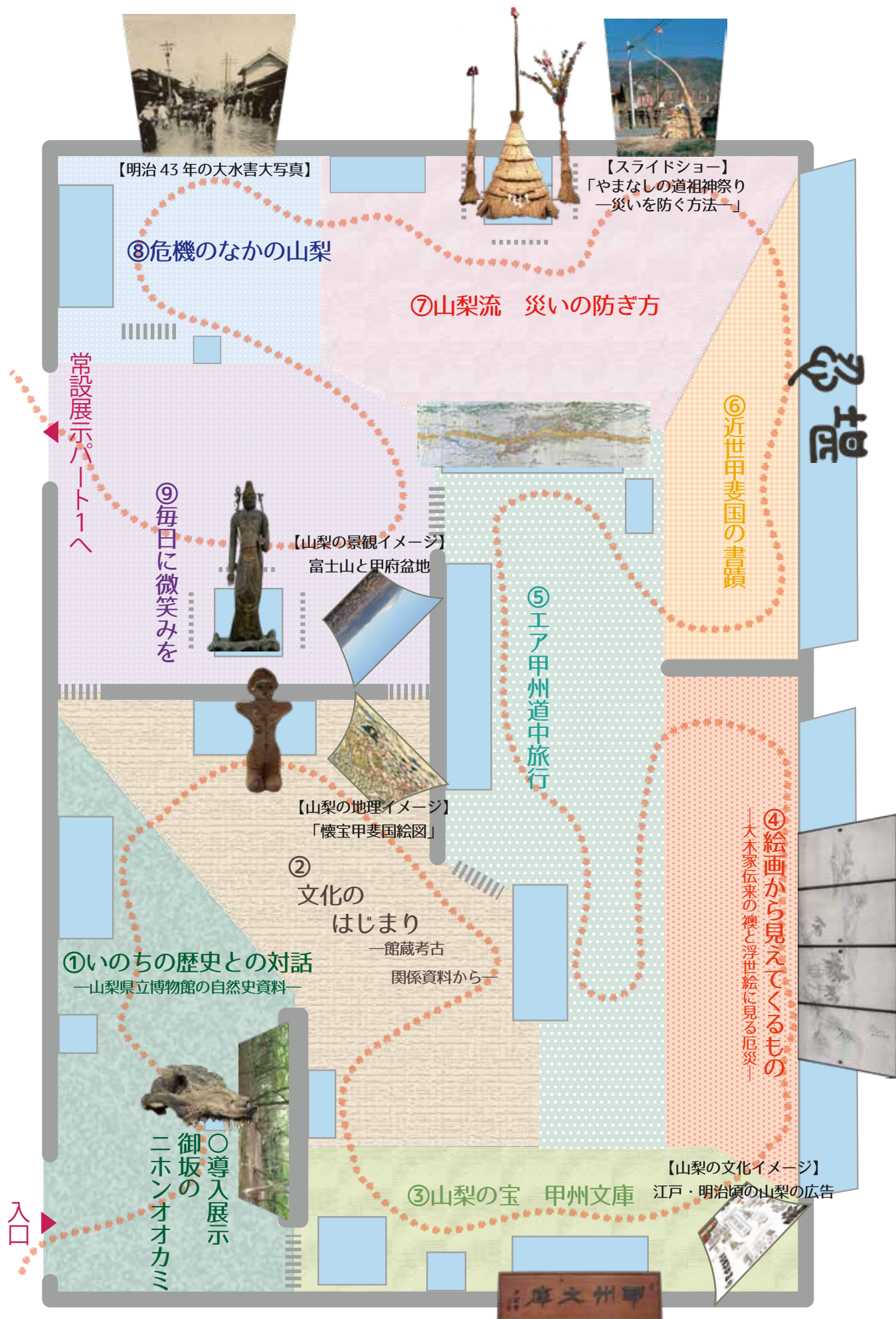
導入展示	御坂のニホンオオカミ	山田英佑
その①	いのちの歴史との対話	山田
その②	文化のはじまり	海老沼真治
その③	山梨の宝 甲州文庫	小畑茂雄
その④	絵画から見えてくるもの	松田美沙子
その⑤	エア甲州道中旅行	海老沼
その⑥	近世甲斐国の書蹟	中野賢治
その⑦	山梨流 災いの防ぎ方	丸尾依子
その⑧	危機のなかの山梨	小畑
その⑨	毎日に微笑みを	近藤暁子

(いずれも当館学芸員)

・本書には展示品のすべての解説を収録しているが、資料写真の一部は掲載されていない。

・掲載している資料は、特に注記のないものは山梨県立博物館所蔵資料である。

・資料の翻刻文については、適宜句読点等を付したほか、人名および地名を除いて表記を当用漢字で統一した。



ニホンオオカミは、明治時代の終わりごろ、生物学的な調査がされる前に絶滅したため、生きていた時の正確な姿すら、よくわかっていません。剥製は全世界に数点しかなく、本種を定義する基準となった標本（「タイプ標本」といいます）は、なんと日本ではなくオランダの国立自然史博物館が所有しています。これは、江戸時代に来日したドイツの医師・シーボルトが標本として収集したものです。

一方、今回展示中の資料は、山梨県内の個人宅で代々保管されていたもので、関東の山間地域でみられた憑きもの落としの信仰しんこうと関係があると言われています。この2点の標本に対する取り扱い方の違いは、自然界のモノを全て記録しようとした西洋と、モノを通した精神的つながりを大切にしてきた日本の、自然に対する付き合い方の違いが表れているようにも思えます。

ニホンオオカミの例に限らず、日本が持つタイプ標本の質・量は、経済先進国のなかで自慢できるものではありません。一方で日本人は、新技術を取り入れつつ、コツコツと成果を積み上げていくことに定評があります。当館の資料は特に状態が良く、今後、ニホンオオカミの謎を解き明かすうえで大きな役割を果たすことになるでしょう。

★資料のひとコト

かつては御坂の山々にも
オオカミが棲んでいたのでしょうか。



ニホンオオカミ頭骨 江戸時代か

ニホンオオカミは、日本の本州、四国、九州に生息していたオオカミである。この資料は、県内の個人宅にて代々保管されていたもので、子供の夜泣きを鎮めるために使われていたという。保存状態は良好で、鼻を中心に皮、肉などの軟部組織が部分的に乾燥して残っている。このような例は極めて珍しく、ニホンオオカミの来歴を分子生物学的に解明するうえでも重要な資料である。

その① いのちの歴史との対話

— 山梨県立博物館の自然史資料 —

山梨県立博物館では、太古の時代から現代まで、時代や種類にとらわれることなく、自然界に存在する資料を幅広く収集しています。ここでは、最近になって博物館に収められた資料をご紹介します。

自然史資料は「いのちの歴史」の証拠となるものであり、博物館は、それらを永久に保存し、将来にわたって多くの人が利用、活用できるようにしていく役割をもっています。一方で、自然史資料の多くはナマモノなので、そのまま放っておけば分解したり、壊れたりして、失われてしまいます。そこで大事になるのが標本づくりです。たとえば、鳥や獣^{けもの}の遺体は多くの場合、骨格標本や剥製^{はくせい}標本にして保存します。頑丈にみえる化石資料も、修復や補強、あるいはレブリカ制作が必要になることは珍しくありません。また、様々な状態のナマモノを目の前にしての標本づくりは、往々にして時間との戦いになることが多く、その仕上がりには作り手の経験とセンスがはつきりと出ます。これが自然史資料の難しいところであり、おもしろいところでもあります。机に向かって勉強するよりも、外で遊んだり工作したりするのが好きな人は、ひよっとすると自然史系の学芸員に向いているかもしれませんね。

★資料のひとこと

この本剥製は、ホームセンターなどで手に入る材料を使って製作しました。



フクロウ本剥製 現代

フクロウは、ユーラシア大陸北部に広く生息し、日本では九州から北海道にかけて分布する。その特徴的な風貌から、森の賢者や学問の神様、さらには「福」を招く縁起の良い鳥として愛されてきた。夜間に活動し、音をほとんど立てずに飛行できるため、人目に付くことは少ないが、人里近くの森林にも生息している。当館の敷地内でも、その姿が確認されている。

★資料の
ひとコト

山梨の未来を拓くりニア工事で発見！
太古の山梨には海岸がありました。



ビノス貝化石

ツキヒガイ化石



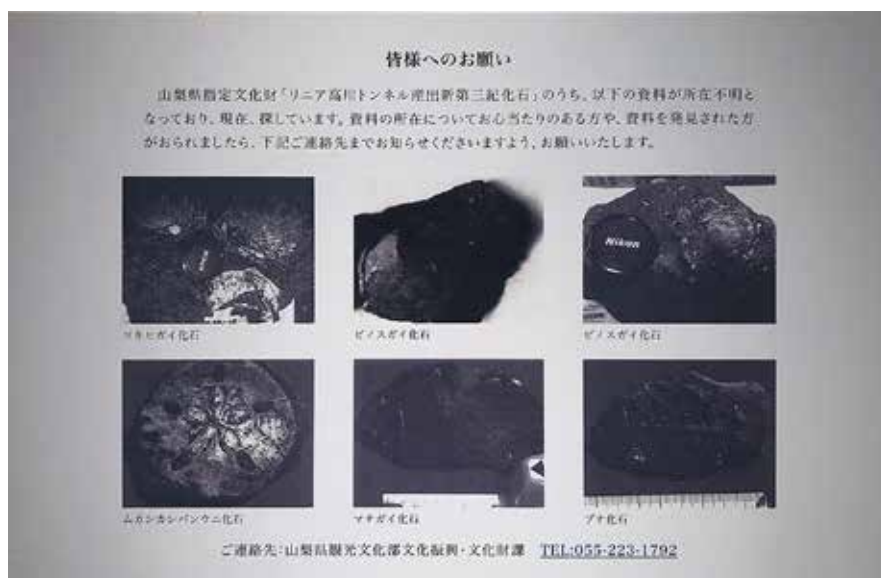
ムカシカシパンウニ化石

生痕化石

リニア高川トンネル産出 新第三紀化石

山梨県指定文化財 新第三紀中新世後期（約 700 万年前）

山梨県大月市初狩町から産出した、新第三紀中新世後期（約 700 万年前）のものと推定される化石群。トンネル内深部から産出されたため、地表面で発見された化石とは異なり、物理的・化学的な風化作用の影響をほとんど受けておらず、極めて良好な保存状態をほこる。この化石群は、おもに潮間帯（潮の満ち引きがおこる場所）に生息する軟体動物からなり、当時の古環境、古地理などを解明するうえでも重要である。



山梨県は縄文時代の遺跡が多く、特に今から約5000年前の縄文時代中期については、多彩な造形の土器や土偶などが見つかっており、全国的にも豊かな縄文文化が展開した「縄文王国」でありました。こうした文化は長野県にも共通し、両県にまたがる縄文時代の遺跡群は「星降る中部高地の縄文世界」として日本遺産にも認定されています。縄文遺跡や遺物は、この地における人々の文化が大きく華開いた「はじまり」を物語る貴重な文化財なのです。

また約1700年前の古墳時代の遺跡としては、甲斐鉾子塚古墳など全国有数の規模を有する古墳があり、注目を集めています。古墳は早くから人々の目に止まり、地域の人々によって調査が行われることもありました。

山梨の県立施設では、考古資料の専門施設として山梨県立考古博物館があります。当館でも、県内の郷土研究者が調査・収集した資料や、遺跡・遺物に関する歴史資料などを収蔵しています。なかには、本県における考古学など学術研究の「はじまり」としての意義をもつものもあります。今回はそれらのなかから、縄文時代の資料、古墳時代の資料、平安時代の資料を紹介いたします。いずれも当時の人々の営みを知るうえで、また山梨の郷土研究の歴史をたどるうえでも、大変貴重な資料です。



岡鉾子塚古墳（笛吹市）
撮影 海老沼真治（当館学芸員）



加牟那塚古墳（甲府市） 撮影 海老沼真治

★資料のひとコト

戦後の食糧不足のため神社周辺を開墾した際に、
たくさんの土器片が見つかったそうです。

深鉢型土器、釣手土器

宮ノ前（七日子）遺跡 縄文時代中期

宮ノ前（七日子）遺跡は山梨市七日市場の七日子神社付近に所在する遺跡で、戦後間もない昭和21～23年（1946～48）に、野沢昌康・上野晴朗・古屋善博氏ら郷土史研究家によって調査が行われ、県内でも初期の調査事例となった。土器は縄文時代中期の曾利式と呼ばれる形式が中心で、釣手土器は山梨・長野が分布の中心のひとつとなっている特徴的な土器である。



深鉢型土器（左2点）と釣手土器（右）の展示の様子

★資料のひとコト

釈迦堂遺跡に代表されるように、
甲府盆地東部は土偶の多い地域のひとつです。

土偶

宮ノ前（七日子）遺跡 立石遺跡 縄文時代中期

土偶は縄文時代の人々の精神世界を表した遺物であり、その多くは女性を象ったものと考えられている。縄文時代中期の土偶は、ほとんどがバラバラに壊された状態で出土するが、宮ノ前（七日子）遺跡、立石遺跡の土偶は、頭部以外はほとんど欠損していないものがあり、注目される。



さまざまな土偶の展示の様子

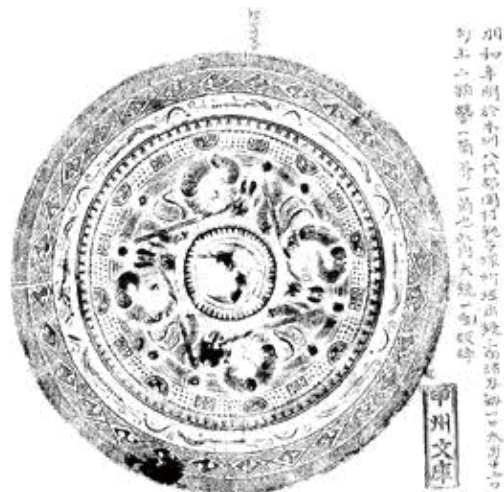
★資料のひとコト

鏡の実物は現在確認できませんので、
この拓本が貴重な資料となっています。

八代郡岡村銚子塚出土大鏡拓本

甲州文庫 江戸時代（18世紀）

明和年間（1764-72）に岡銚子塚古墳（笛吹市）から掘り出された銅鏡2点の拓本。他に剣や太刀、勾玉なども発見されたという。このうち右側（本書図版では上側）の龍鏡は、甲斐銚子塚古墳（甲府市）でも出土しており、両古墳の関係が注目される。江戸時代の甲斐の国学者・萩原元克（1749-1805）の旧蔵品と伝わっている。



大鏡拓本（上・下）

★資料のひとコト

団栗塚は八代町域でも
特に古い古墳と考えられています。

東八代郡八代村奴白の古墳発見記録

檜峰神社武藤家文書 明治22年（1889）

明治時代における古墳発見の記録。八代村（笛吹市）で地元の人が「ズンクリ塚（団栗塚）」と呼ぶ古墳があり、道路工事のため古墳の土を掘ったところ、内部を朱で着色した石室が発見され、そのなかから白骨や鏡、剣などが見つかったという。古墳は前方後円墳と推定され、出土した鏡は南北八代熊野神社が所蔵している（県指定文化財）。



★資料のひとコト

周辺には「千塚」という地名が残り、
古墳が多い地域だったことがわかります。

埴輪

加牟那塚古墳 古墳時代（6世紀）

加牟那塚古墳（甲府市）は山梨県における古墳時代後期の代表的な古墳で、石室は姥塚古墳（笛吹市）に次いで県内第2位の規模を誇る長大なものとして知られる。山梨県内では埴輪を持つ古墳は少なく、6世紀代の古墳では、現時点では加牟那塚を含む5例が知られる程度である。埴輪は円筒形のほか形象埴輪（武具などの器財、家形、人物など）があり、朱で着色されたものもある。

かいじあむ^{ふらす}十のポイント！

甲斐国「ご当地土器」のはじまり — 甲斐型土器 —

「甲斐型土器」って？ 山梨県内で奈良・平安時代の遺跡^{いせき}を発掘調査^{はくくつ}すると、必ずといって良いほどに出土する素焼き^{すやき}の土器^{どき}（土師器^{はじき}）があります。坏形^{つきがた}のものは、直径は10センチメートル、高さ5センチメートル程度の大きさで赤茶色をしており、内側に暗文^{あんもん}と呼ばれる放射線状^{もくしきよう}の文様^{もんよう}を伴うなどの特徴を持った土器です。甲斐国内で独自に生産された特色ある土器ということで、現在では「甲斐型土器^{かいがたどき}」と呼ばれ、特に上記のような形の坏が大量に発見されています。

研究の出発点 郷土史研究家^{うえのほろお}の上野晴朗氏は、昭和21～23年（19

46～1948）に調査した宮ノ前^{みやのまえ}（七日子^{ななひこ}）遺跡^{いせき}でこの土器を発見し、翌年から調査が始まった近隣の日下部遺跡^{くさかべ}でも同様の土器が大量に出土したこと、これらの土器を「日下部式」と命名し、地域独自の特徴をもつ土器であると評価しました。当時はまだ、奈良・平安時代の地方出土の土器について本格的な検討が行われることはほとんどありませんでした。「日下部式」は後に「甲斐型」と名付けられますが、両遺跡は、甲斐国^{かいのくに}の「ご当地土器」ともいえる甲斐型土器に着目した遺跡調査の「はじまり」として、甲斐国の奈良・平安時代土器研究の出発点となったのです。

★資料の ひとこと

日下部遺跡は、現在の山梨市立山梨北
中学校の敷地にあたります。

甲斐型土器 坏 宮ノ前（七日子）遺跡 平安時代（9世紀）

甲斐型土器は現在の甲府市東部を中心に生産された土器で、甲斐国が主導して生産し、甲斐国内をはじめ近隣諸国に広く流通した。宮ノ前（七日子）遺跡のものは初期の発掘事例であり、近隣でほぼ同時期に発掘調査が行われた日下部遺跡からも多量の同型土器が出土し、甲斐国独自の形式を持つ土器として注目された。また両遺跡周辺は、古代山梨郡加美郷^{かみ}の中心地と推定されている。

★資料の ひとこと

大坪遺跡周辺は古代甲斐国府にも近く、
重要施設が集まっていたと推定されます。

甲斐型土器 皿 旧甲運村（甲府市）出土 平安時代（9世紀）

甲運村（甲府市横根町・桜井町・和戸町・川田町）で出土した甲斐型土器の皿。出土地の詳細は記録されていないが、同様の皿は大坪遺跡（甲府市横根町）で大量に出土している。大坪遺跡は甲斐型土器の生産拠点と考えられており、関連が注目される。

★資料の ひとこと

甲府盆地で生産された土器が、峠を越えて
河口湖周辺にもたらされたものです。

「布カ」墨書土器

旧長浜村（富士河口湖町）室沢出土 平安時代（10世紀）
長浜村室沢（富士河口湖町長浜）で発見されたとの記録をもつ甲斐型土器で、「布」とみられる墨書がある。河口湖周辺では滝沢遺跡や大石遺跡（ともに富士河口湖町）など、近年の発掘調査で甲斐型土器を多数出土する遺跡が確認されており、この土器もそれらと関連する可能性がある。



唯一の当館所蔵の墨書土器

かいじあむ^{ふし}のポイント！

懐宝甲斐国絵図 江戸時代のやまなし探検

江戸時代の村の数は約八〇〇か村 現在、山梨県内の市町村は27、昭和と平成の大合併の間は64の市町村で構成されていました。さらにさかのぼると、明治初期の大合併の際は280あまりの村がありましたが、それ以前の江戸時代の終わりごろには約800の村がありました。概ね、現在の大字^{おおあざ}に相当する区域が江戸時代の村だったのです。

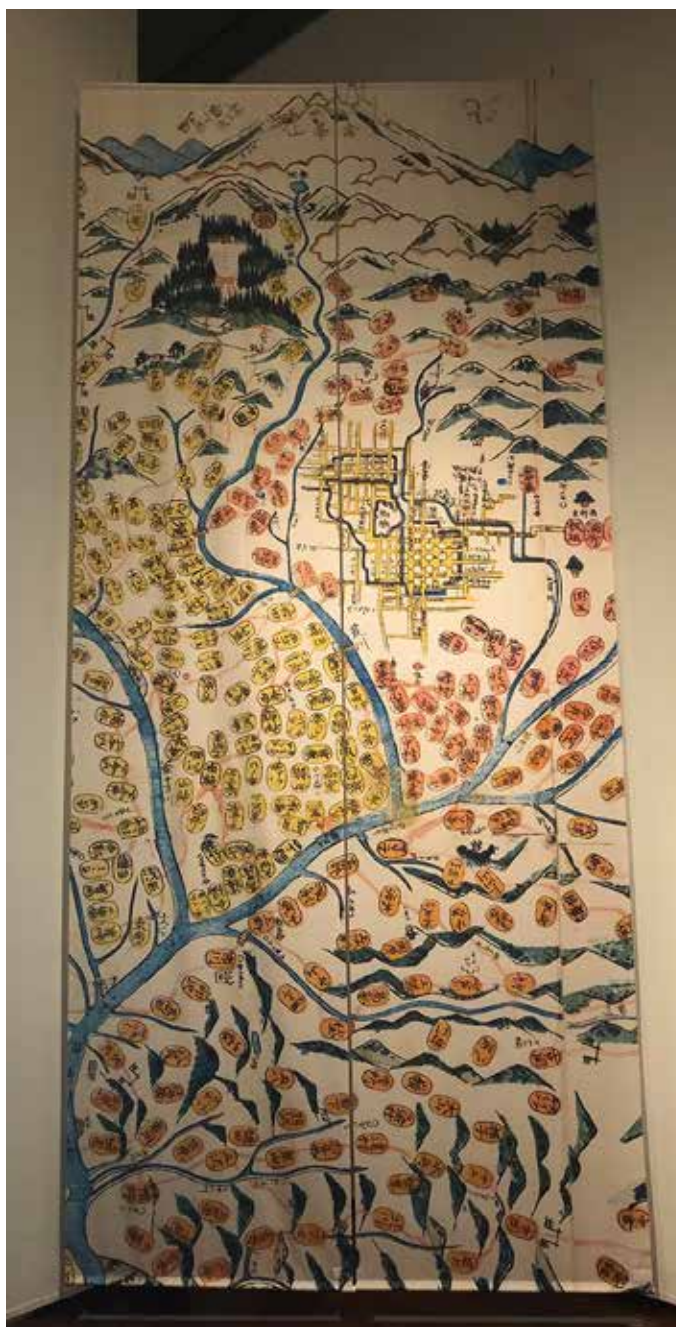
お住まいをさがしてみよう！ 「文化のはじまり」のコーナーの角にぶらさがるこの地図の実物は、次のコーナー「山梨の宝 甲州文庫」に展示しております。「小さくて見えない！」という方は、ご自宅のパソコンで当館ホームページ上にて高精細でご覧になれますのでお試しください。なお、高精細画像は「Adobe Flash」を使用しますので、各自セキュリティに配慮のうえ、ご覧ください（「Adobe Flash Player」のサポートは今年いっぱい（令和2年末）となっておりますのでご注意ください）。

山梨県立博物館ホームページ
高精細資料ページ QR コード

スマートフォンでは地図の閲覧はできません。URL 情報のメモ代わりに記録してください。
展示室でのコード読み取り以外のスマートフォンのご使用はご遠慮ください。
当館ホームページトップページの左側メニュー「お楽しみ資料」からもみることができます。



「懐宝甲斐国絵図」高精細画像の URL
http://www.museum.pref.yamanashi.jp/4th_syuzousiroyo_zoom_kaihokofu110917.htm
その他、絵図や屏風類も閲覧できます。



防災バナーで製作された「懐宝甲斐国絵図」
実物は次の「山梨の宝 甲州文庫」で展示中

いまからおよそ70年前、郷土の歴史資料の宝庫そのものといえる「甲州文庫」が山梨県にやってきました。

「甲州文庫」は南アルプス市出身の功刀くぬぎ内氏ないが収集したもので、

山梨県の社会・文学・政治・経済・人物など、あらゆるジャンルの歴史を知ることができる資料約2万点からなる資料群です。山梨県は戦争中の甲府空襲によって、千名以上の人命とともに、江戸時代以来積み重ねて来た多くの文化遺産を失っています。戦後まもなく功刀氏より譲渡を受けた甲州文庫は、失われてしまった山梨県の人々の地域らしさや心の拠より所を補ってくれた、まさに重要な「宝物」となったのです。

山梨県立博物館では、開館以来、常設展示や企画展、シンボル展などにおいて、「甲州文庫」を活用し、山梨県の豊かな歴史をお伝えしてまいりました。今回は改めて「甲州文庫」の重要性をご紹介しますとともに、これまであまりお目にかけてこなかった資料をご紹介します機会とさせていただきます。常設展示室パート①(従来の展示室)では、どれが「甲州文庫」かな?、と探しながらご鑑賞いただくのも楽しいかもしれませんね。

★資料の
ひとこと

甲州の約800の村々がびっちらと!

懷宝甲斐国絵図 甲州文庫 天保13年(1842)

甲斐国全域を描いた地図。各村は当時の4郡(山梨・巨摩・八代・都留)ごとに色分けされ、赤い実線で道筋が示されている。道筋には関所や宿駅が記されているほか、古跡や温泉、寺社なども書き込まれており、当時の甲州を旅するうえでの必携地図と言えそうである。発行元は甲府八日町の藤屋(内藤)伝右衛門で、のちに「峡中新聞」を発行する伝右衛門の先代か。



★資料の
ひとこと

最後の 100 回目に突かれた札が
一等賞高額当選になりまーす！

富突き^{きり}錐・木札 甲州文庫 江戸時代

富籤の抽選に使用された道具一式。富籤は現在の宝くじに相当するもので、寺社の普請（修理）資金調達などのためにおこなわれた。番号が記された富札が販売されて、抽籤日には番号を書いた木札を箱に入れ、これを錐で突いて各種褒美金の当選を決めることから、「富突き」とも呼ばれた。



富突きの錐（上）と箱に収まった 100 枚の札（下）

かいじあむ^{ふらす}十のポイント！

富の札売りと富突きのようす

現代の宝くじ？ 「富仕法書」^{とみしほうしよ}（甲州文庫）によると、文政12年（1829）

の表門神社（市川三郷町）のケースでは、販売される札数は1万5千枚、

それぞれの札には「地」・「福」・「円」（圓）・「満」・「楽」の文字と数字の組

み合わせが書かれていました。代金の札料は銀3匁^{もんめ}7分5厘^{りん}。

ドキドキの富突き 気になる当選した場合のことですが、突き順の第1・

2・3番にそれぞれ宝金30・20・10両、5や10の倍数の番にも5・3両、

50番目には50両、突留^{つきどめ}（最終抽籤^{ちゆうせん}）となる100番目には90両が渡されました。

またそれぞれの「当選」番の前後には、「両袖^{りょうそで}」という若干の前後賞も渡されて



別のアングルからみた富突きの錐と
右から「楽」、「地」、「満」、「福」、「円」
と記されている木札



村松蘆洲「甲斐の富突興行」（「山梨日日新聞」連載記事 昭和6年）より 「突富興行記」（甲州文庫）所収

かいじあむ^{ふらす}十のポイント！

モダンボーイの古文書収集 甲州文庫主 功刀亀内

オートバイを乗りまわす「モボ」「モボ」とは「モダンボーイ」の略で、大正時代ごろの流行に敏感な男子のこと。女子の場合は「モガ（モダンガール）」。

甲州文庫を蒐集^{しゆしゆう}した功刀亀内^{くぬぎきない}（1889～1957）は、中巨摩郡豊村^{なかくま ゆたか}（南アルプス市）に生まれ、青年時代には甲府で最初にオートバイを購入して、山梨から長野にかけて乗りまわしていたと回顧^{かいこ}するほど、新しいものを好む人物でした。そのような若者だった功刀は、「他人がお金を欲しがるのと同じ気持ちで資料を欲しがる」と評されるほどの、古文書など「古い」資料集めの第一人者へと変貌をとげていくことになります。

古紙漁^{こしり}りが「病みつき」に 功刀が「古いもの好き」に転向するきっかけになったのは、甲州財閥^{こうしゅうざいばつ}の若尾家^{わかおけ}が進めていた「山梨県志^{やまなしけんし}」編纂^{へんさん}事業^{じぎょう}でした。飛脚^{ひきやく}のことを知りたいと思った功刀は、専門家がいます県志編纂会を訪ねたところ、郷土史家^{きょうどしや}の土屋夏堂^{つちやかどう}から、「古い資料は集める人がいないと潰^{つぶ}されてしまう」と聞きます。それならば私がやってみようと思ひ立ち、処分される古紙漁^{こしり}りをしてみると、貴重な資料が次々と見つけ出せるではありませんか。次第にこの古物調査が「病^やみつき」となり、その道の第一人者への第一歩となったのでした。

★資料のひとコト

和装の元「モダンボーイ」

功刀亀内肖像写真 甲州文庫 昭和時代か

甲州文庫の収集者である功刀亀内の肖像写真。40代にしかかかる昭和初期にすでにちょび髭スタイルとなっており、撮影年代は不明。



▲ 大正5年（1916）諏訪行遠乗り会「写真貼込帖2」（甲州文庫）
中央のハンチング帽の人物が功刀亀内。当時27歳ごろ。



◀ あふれる古書類と功刀亀内「甲州文庫移管関係綴」（甲州文庫）
県移管の昭和26年（1951）ごろ。



★資料の
ひとこと

きっとどこかで
見たことがあるはずのフォントです。

甲州文庫扁額

甲州文庫 昭和5年(1930) 中村不折筆

中村不折揮毫による扁額。裏面には「昭和五年七月刻」と彫られている。中村は「新宿 中村屋」や清酒「真澄」のロゴや、夏目漱石「吾輩は猫である」の挿絵画家としても知られている。甲州文庫主・功刀亀内による入手の経緯は不明だが、甲州文庫が功刀邸内にあった頃には、資料類がぎっしり詰まった棚にこの扁額が掲げられている写真が遺されている。

東京上野の功刀邸時代の甲州文庫扁額
「甲州文庫移管関係綴」(甲州文庫)より



★資料の
ひとこと

昭和26年の甲州文庫特別展示会にも
かなばんからこなからまで展示されました。

甲州枡各種 甲州文庫 江戸時代

古くから甲州(山梨県)でのみ使用されてきた特殊な枡。一般的な京枡と比較して、甲州枡1升は京枡3升到相当する。甲州枡の一升枡は鉄判と呼ばれ、その4分の1の容積の端子、さらに2分の1の半、またさらに2分の1の小半があり、用途に応じて使用された。また、枡の内側と外側とに、職人による焼き印が押されているのも特徴である。

★資料の
ひとこと

69年前に展示されたものも、
今回の会場に展示されています。

甲州文庫移管関係綴 甲州文庫 昭和26年(1951)

甲州文庫の県移管に係る書類や電報、関連記事のスクラップ、写真類などを収めたもの。移管後の昭和26年11月1日から7日にかけて、県庁敷地内にあった当時の県立図書館内で開催された「甲州文庫特別展覧会」の目録(出品リスト)の現物も綴じられている。



★資料の
ひとこと

山梨＝水晶というイメージも
全国的に根強く広まっています。

甲斐国水晶眼鏡 甲州文庫 明治13年(1880)

山梨県産の水晶でレンズが作られた眼鏡。フレームは鼈甲か。山梨県内には大正時代ごろまでは、水晶を産出する山がいくつもあり、原料供給地であることから加工技術も発展し、現在の甲府市を中心とした宝飾研磨産業の礎となった。

★資料の
ひとこと

功刀亀内と甲州文庫が
激動の昭和前半をくぐり抜けて来た記録。

甲州文庫関係記事集帖 甲州文庫 昭和時代

昭和初期から甲州文庫の県移管後にかけての、関係記事や写真、印刷物などのスクラップ帳。昭和18年(1943)の甲州文庫が東京から山梨へ疎開したことを報じる記事や、同24年の郷土歴史展の開催状況の写真、同32年の功刀逝去時の会葬礼状などが収録されている。

かいじあむ^{ふらす}十のポイント！

10日間で10万人 郷土文化の「復興」もたらす

会場は松林軒デパート！ 戦争の痛手もまだいえぬ昭和24年（1949）10月。甲府空襲^{くうしゅう}後わずかに焼け残った建物のひとつ松林軒デパート^{しょうりんけん}を会場に「甲府市制六十周年記念郷土歴史展」が開催されました。この展覧会^{くぬぎきない}で功刀亀内^{くぬぎきない}出品の「甲州文庫」が大きな評判を呼び、10日間程度の会期で約10万人の入場者を集める大盛況となりました。これほどの人気となったのは、空襲が多くの人命とともに、街そのものと数百年^{つち}培われてきた文化、そしてその証拠とも根拠ともいえる文化財や歴史資料をも焼き尽くしていたからでしょう。人々は永遠に失われたと思っていた郷土文化の精粹^{せいすい}を、「甲州文庫」に再びみつけることができ、釘付けになったのです。この盛況と反響は、「甲州文庫を山梨県へ」という機運につながっていきました。

かつての県立図書館で 昭和26年（1951）、甲州文庫の功刀氏から山梨県への譲渡が決まり、同年11月、当時の県立図書館で特別展示会が開催されました。以来、甲州文庫は山梨県の歴史を語るうえで、なくてはならない資料となりました。来年（令和3年）、甲州文庫は山梨県移管70周年を迎えます。

★資料のひとこと

功刀氏は彫り物上手でもありました。「甲州文庫」印も自作かもしれませんね。

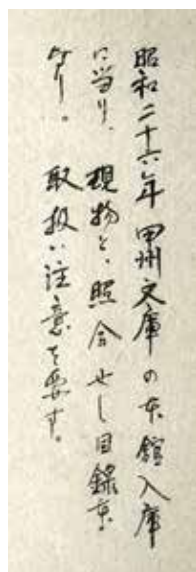
甲州文庫図書目録

甲州文庫 昭和18年（1943）・同26年（1951）

戦時中に功刀亀内自らが作った目録と、昭和26年の県移管時の資料の現物との照合用に使用された目録。前者の巻末には、「甲州文庫」の印影数種類が記録されている。



さまざまな「甲州文庫」印 ▲「甲州文庫図書目録」（甲州文庫）昭和18年版の巻末に記録されている。



▲ 昭和26年版表紙裏の記載「甲州文庫」県移管時に使用されたものと思われる。

【解説文】
昭和二十六年甲州文庫の本館入庫に当り 現物と、照合せし目録本なり。
取扱に注意を要す。



▲▲ 甲府市制60周年記念郷土歴史展会場にて「甲州文庫関係記事集帳」（甲州文庫）前列に功刀夫妻。左上方に「甲州一蓮寺地内 正木稲荷之略図」らしき資料が確認できる。壁への資料直貼り展示に時代が感じられる。
▲ 県移管後の甲州文庫特別展示会会場 「甲州文庫移管関係綴」（甲州文庫）会場は当時の県立図書館（先々代、のち県庁舎として使用）。

その④ 絵画から見えてくるもの

— 大木家伝来の襖と浮世絵に見る厄災 —

山梨県立博物館は「富嶽三十六景」を始め多くの絵画資料を収蔵しています。今回はそのなかでも、見れば見るほど、制作された当時の姿に思いを馳せることのできる作品をご紹介します。

まずは甲府の豪商、大木家の資料のひとつ「高林古翠図」です。水墨に淡彩で表されたこの襖絵は、大木家で実際に仕切りとして使われていたことから、淡彩部分はわずかに色をとどめるに過ぎません。こうしたちよつとしたところから、長い間使われてきた歴史を感じることもできるでしょう。

もうひとつは、厄災関連の浮世絵作品です。新型コロナウイルスが猛威を振るうなか、その姿を拝めば難を逃れるという「ヨゲンノトリ」などがSNS上で拡散されていますが、江戸時代も疫病から逃れるため、「疱瘡絵」などさまざま浮世絵が作られました。また地震などの天災が起こった際、特に安政の大地震後に多く世に出された「鯨絵」などの風刺画は、当時の世情を大いに物語っています。

襖絵と浮世絵、性格の異なる資料ですが、どちらも往時の生活を垣間見ることができる、貴重な収蔵資料です。じっくりとご覧いただき、ぜひ当時の姿に思いを寄せてみてください。

★資料のひとこと

中丸精十郎 最大の文人画作品

高林古翠図 大木コレクション 中丸精十郎作 明治5年(1872)

中丸精十郎は甲府生まれの画家で、文人画から洋画に転向した。本作は大木家の襖絵として描いたもので、文人画家時代に号した「金峰」の落款と、書き込みから明治5年の春に作成されたことが確認される。仕切りとして大木家で使用されてきたことから、淡彩で表された部分は色褪せており、長年使われてきたその歴史を感じることができる。



※本コーナーでは、下記の日程で展示替えをおこないますのでご注意ください。

【前期展示】 令和2年6月17日(水) から7月27日(月) まで

【後期展示】 同年7月29日(水) から9月7日(月) まで



▲「麻疹養生之伝」国立国会図書館蔵
文久2年（1862）歌川芳虎画
麻疹は一生の大厄であり、もし治ったとしても、風に当たらないように養生すべきと書いてあるほか、食べてはいけないもの、食べたほうがよいものなども記されています。



▲「はしかのまじなひ たらやうの葉」
国立国会図書館蔵
文久2年（1862）歌川芳艶画
本図を貼って絶えず眺めると、たとえ麻疹にかかっても軽くなると書かれています。「麦殿は生れぬ先に麻疹してかせる後ハ我身なりけり」という唄を、たららの木の葉に書き川に流すというまじないがありました。

かいじあむ^{ふらす}のポイント！

疫病と浮世絵 浮世絵に見る厄災

お見舞いにおすすめ

疱瘡^{ほうそう}は天然痘^{てんねんどう}のことであり、当時は有効な治療方法がなかったことから、流行すると命の危険にさらされました。赤絵^{あかえ}

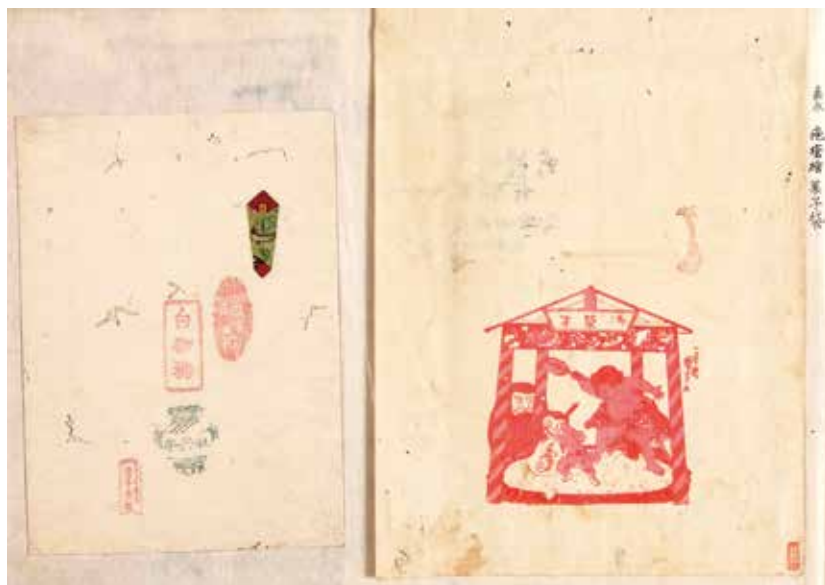
と呼ばれる疱瘡絵は、縁起^{えんぎ}のよい人物や動物などを主に赤一色で摺^すったもので、疱瘡にかかった人へのお見舞いに用いられました。菓子袋などにも施され、赤一色のお菓子袋に軽焼き^{かるや}などをいれて、病児のもとへ持つていったのでしよう。

浮世絵にみえる当時の感染症

麻疹^{はしか}に関する浮世絵^{うきえ}、通称麻疹絵^{はしかえ}は、

文久2年（1862）に大流行した際に多く作られました。麻疹の症状を軽くするまじないや養生法^{ようじょうほう}など、描かれた内容は多岐にわかり、当時の状況を物語る資料といえます。

他にもコレラや流行病全般に関して浮世絵作品が残されており、当時の人々が明確な治療法がないなかで、いかにこうした病と対峙^{たいじ}してきたかを知ることができます。



升太の広告集

★資料のひとこと

人気浮世絵師 お菓子屋さんのために菓子袋を描く【前期】
赤色の菓子袋を持ってお見舞いに行こう【後期】

菓子袋（升太の広告集） 甲州文庫 江戸時代 歌川国芳筆（前期のみ）

【前期】甲府八日町の菓子屋、升屋太郎右衛門こと升太の広告類が貼られた貼交帳^{はりまぜちよう}に見られる、浮世絵師の歌川国芳^{うたがわくによし}が手掛けた菓子袋。行司の金太郎と、相撲をとる兎とみみずく、達磨が赤色で表されたいわゆる疱瘡絵である。疱瘡絵とは、疱瘡に赤が効くといわれていたことから疱瘡患者に見舞品として贈られた錦絵の一種であり、全体が赤色で摺られている。
【後期】甲府八日町の菓子屋、升屋太郎右衛門こと升太の広告類が貼られた貼交帳に収められた菓子袋。升屋のマークである升形で囲まれた枠の中に升屋太郎右エ門製と書いてあることから、升太で使われていたことがわかる。疱瘡に赤が効くといわれていたことから、全体を赤で摺り、見舞品の菓子が入れていたのだろう。

【前期展示】 6月17日（水）から7月27日（月）まで

★資料の ひとコト

ちゃんと薬で治そうね

妙医甲斐徳本麻疹之来記

甲州文庫 歌川芳藤作 文久2年（1862）

おもちゃ絵を得意とし、幕末から明治に活躍した浮世絵師、^{うたがわよしふじ}歌川芳藤の手による大判2枚続の錦絵。病は祈祷^{きとう}などではなく、薬を用いて治すようにと医者が諭している。なお、描かれているのは永田徳本^{ながた とくほん}という医者で、不確かな部分も多いが、甲斐国に長く滞留したと伝わることから甲斐徳本とも呼ばれた。諸国をまわり治療を行ったといわれている。

★資料の ひとコト

地震の後に大儲け

流行職人尽

三枝家資料 安政2年（1855）以降

安政2年（1855）の10月2日に起こった安政の大地震後、^{なまず}鯰絵など多くの風刺画が出回ったが、本図もそのひとつになる。地震後に倒壊した家屋を建て直すため、大工や左官など建築関係の職人が好景気になったことから、それらの職人たちをまとめ番付にしたものである。歌舞伎の番付がごとく、役者のように見えを切る姿で描かれている。

★資料の ひとコト

さよなら！麻疹の神様

麻疹^{はしか}送出シの図

三枝家資料 歌川芳藤作 文久2年（1862）

麻疹神が手足に斑点をつけた童子の姿として描かれている。御幣が立てられ、鏡餅が供えられた童子は、擬人化した水飴や汁粉など、発病時に食べると良いとされた食物に竹の棒で担がれている。医療事情が整わないなか、人々は流行の終息を神頼みで願うことが多く、本図も江戸の神送り（疫病を外に送り出す呪術的な行事）を描いたもののひとつである。

★資料の ひとコト

ちよいとそこのひげのお兄さん、遊んでかない？

治る御代 ひやかし鯰

三枝家資料 安政2年（1855）以降

安政の大地震後、11月4日には幕府は火事で焼け落ちた吉原に、仮宅（仮の遊廓）の営業を認めた。本図は「瓢箪^{ひょうたん}鯰^{おお}（大津絵の画題のひとつで猿が鯰を捉えようとする図、もとは「瓢^{ひょう}鮎^{ねんす}図」に由来する）」に題材をとったもので、仮宅に現れた鯰が^{かむろ}禿と^{おいらん}花魁に捕まり、瓢箪に似た鹿島の徳利で押さえつけられてしまった、という内容である。



前期展示のようす

【後期展示】 7月29日（水）から9月7日（月）まで

★資料の ひとコト

金太郎の力で伝染病も吹き飛ば

御菓子袋

上野晴朗氏収集資料 江戸時代

金太郎が中央に描かれた菓子袋で、まわしをつけた金太郎が土俵に上がり、しこを踏んでいるようである。金太郎の肌は赤く描かれることが多いが、これは^{ほうそう}疱瘡^よ除けの意味合いがあるといわれている。他にも桃太郎や源為朝、^{しろうき}鍾馗、みみずく、兎、達磨などが^{かたど}疱瘡^の絵の題材として使われていた。

★資料の ひとコト

地震に負けずみんなで乗り越えよう

地震後野宿の圖

三枝家資料 安政2年（1855）以降

安政2年（1855）10月2日の午後10時頃、のちに安政の大地震と呼ばれる大きな地震が起こった。江戸では多くの家屋が倒壊し、圧死者、焼死者は埋葬された者だけでも約7千人におよんだという。本図は倒壊する家や火事から、着の身着のまま逃げ出した江戸の人々が、地震後に皆で集まり野宿をする姿が表されている。

★資料の
ひとつ

地震を起こした鯰、島流しになる

鯰の流しもの

三枝家資料 安政2年(1855)以降

恵比寿は神無月に出雲へ行く神々の代わりに留守番をしたことから、10月に起こった安政の大地震関連の鯰絵にはたびたび登場する。本図は留守居役の恵比寿に鯰がつかまり、鹿島大明神(鹿島大明神が要石で地中の地震鯰を抑えていたと信じられていた)のもとに連れていかれ沙汰を受けているところ。鯰を縛っている紐が、鯰自身のひげというのが面白い。



▲「老なまづ」国立国会図書館蔵
仮名垣魯文作・河鍋暁斎画
謡曲『老松』の歌詞に地震を取り入れて書いた「老なまづ」という錦絵が、地震発生直後に出版された「鯰絵」として知られています。



▲「(神馬)」国立国会図書館蔵
大地震で助かった人の着物に馬の毛のようなものがついていたことから、これは伊勢の神馬が助けてくれたのだ、という噂が広がり、本図のような錦絵にも描かれました。

★資料の
ひとつ

いろんな鯰絵、ご覧あれ!

鯰絵

三枝家資料 安政2年(1855)以降

安政の大地震後、数多く出された鯰絵のひとつで、大判サイズ(約38cm×26cm)の錦絵が4つの場面にわかれ、それぞれに異なる趣向の鯰絵が描かれている。鹿島大明神がいないうちに地震を起こすことをもくろみ大工に金をばらまく鯰や、地震によって苦しめられた江戸の町民たちに懲らしめられる鯰などが表されている。

かいじあむ+のポイント!

安政の大地震と鯰絵 浮世絵に見る厄災

地底のナマズ 安政2年(1855) 10月2日の午後10時ごろ、大地震が江戸の町を襲いました。その地震の発生後に、爆発的に刊行されたのが鯰絵と呼ばれる風刺画です。普段は要石によって押さえ付けられていた地底の鯰が動き、地震が起こったとの俗信から生み出され、現在200種類以上もの鯰絵が確認できます。作者や版元が明記されないものが多いなか、当時の人気浮世絵師たちも作成に関与していたと言われています。

鯰絵にみる世相 鯰絵にはいくつか種類があり、要石で鯰を押さええているものや、地震によって仕事が立ち行かなくなった町民たちが鯰を懲らしめるもの、また倒壊した家屋の修理で収益があがった大工や左官と酒盛りをする鯰の絵など、多種多様にわたっています。エスカレーターする鯰絵を規制するため、幕府は地震発生から約2ヶ月後に版木を没収しますが、こうしたところからも当時大きな社会現象になっていたことが読み取ることができます。

新型コロナウイルスが人々におよぼした大きな影響のひとつに、「移動の制限」があげられます。海外旅行はもちろんのこと、県境をまた

いだ移動も自粛され、「ステイホーム」が求められました。そんな

かでも人々は、少しでも旅行やイベントの気分を味わおうと、ステイ

ホームしながら、オンライン上でさまざまな画像・映像を楽しむ

「エア●●」が流行しています。

自粛は緩和されてきたけど、まだまだ思い切り旅行を楽しむような気分にもなれない：このコーナーはそんな皆様のために、博物館の展示で甲州旅行の気分を味わっていたく場として設けたものです。舞台は江戸時代の甲斐国の大動脈である甲州道中。五街道のひとつに数えられ、江戸日本橋から西へ進んで甲斐国に入り、上野原・大月・勝沼・甲府・韮崎などを経て信州下諏訪に至る、全長約210キロメートル、甲斐国内だけでも約100キロメートルにおよぶ街道です。

まずは旅の下調べと準備から。旅程や旅先の名所・宿泊地を確認して、パスポート（通行手形）の申請も忘れずに。ガイドを頼りにさまざまな名所を見物しながら道中を歩き、旅の終わりに思い出を旅日記として残せば、江戸時代の旅人たちも顔負けの「エア甲州道中旅行」をお楽しみください。

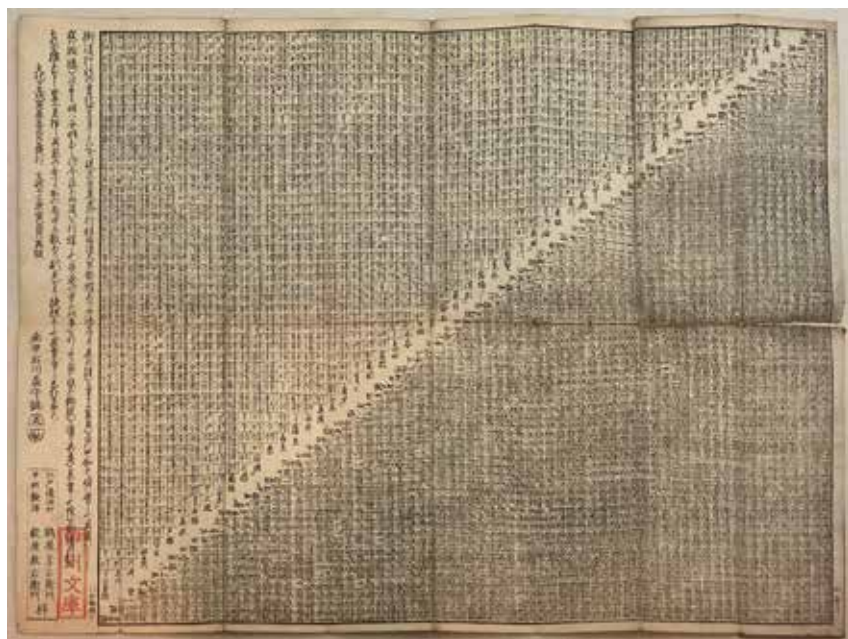
ステップ1 まずは旅の下調べ

★資料の
ひとこと

階段のように示されるこの表の形は、
現在も使われています。

東海道・中山道行程早見表 甲州文庫 文政13年（1830）

東海道と中山道の全宿場とその路程について、現在の運賃表のような形式で一目でわかるようにまとめたもの。版元は江戸鶴屋喜右衛門、甲州鰍沢の穀屋紋右衛門の連名となっており、甲州でも頒布されたものと思われる。インターネットで経路検索をするようになるまで、多くの人がこのような運賃・路程表と地図を見ながら旅行の計画を立てていた。



★資料のひとこと 気になる旅の料金情報がわかる
ガイドブック

甲州街道 甲州文庫 天保7年(1836)

甲州道中内藤新宿から甲府までの宿ごとの路程と馬や人足の料金を記したガイドブック。ほかに甲府から尾州宮(熱田宿)、大山道、富士道、須走～甲府の路程も紹介する。



▲▲ (上2段) 甲州街道の展示のようす

▲ (下段) 甲州道中細見記の展示のようす

★資料のひとこと 旅人が持ち運ぶのに
邪魔にならないガイドブックです。

甲州道中細見記 甲州文庫 嘉永4年(1851)

甲州道中を江戸日本橋から甲府まで、甲府から先はそのまま甲州道中を進んで信州へ至る道と、駿州往還を通して身延山、駿河へ至る道の宿場や路程、近隣の名所などを記したガイドブック。大きさは9×19cm程度とコンパクトで、旅行者が懐にいられて用いるポケットガイドのような形で利用されていたのだろう。

★資料のひとこと 宿や休憩場所の情報は、
今も必須のチェックポイントですね。

諸国道中商人鑑 甲州文庫 文政10年(1827)

甲州道中内藤新宿から甲府まで、甲府からは駿州往還を通して身延山に至るまでの道程における、各宿場の旅籠や商店を紹介したガイドブック。これもコンパクトサイズで旅行時の携帯用に作られたものと考えられる。



▲ 諸国道中商人鑑 栗原～石和宿のページ

ステップ3 通行手形の入手

★資料のひとこと 庶民の旅の目的の多くは
「社寺参詣」でした。

関所通行手形 甲州文庫 慶応4年(1868)

下条西割村(韮崎市)の百姓源兵衛が、大山の石尊権現(神奈川県)へ代参するために発行された通行手形。村名主が源兵衛の身元を保証するとともに、諸国の関所・役人に通行の許可を依頼する形式をとる。



【解説文】
差上申通り手形之事
成澤勘右衛門御支配所甲州巨摩郡
下条西割村百姓源兵衛、先年仕来り
大山石尊様村内四拾人代参として
参慶いたし候もの二相違無御座候間、
右此もの儀道中筋并ニ
御関所無差支之様御通し可被下様
奉願上候、為念差出申通り手形仍而如件
慶応四年 成澤勘右衛門御支配所
辰七月七日 甲州巨摩郡
下条西割村
名主
御関所 庄右衛門(印)
御役人中 同村百姓
源兵衛(印)

かいじあむ+のポイント！

甲州道中の宿場・名所・難所

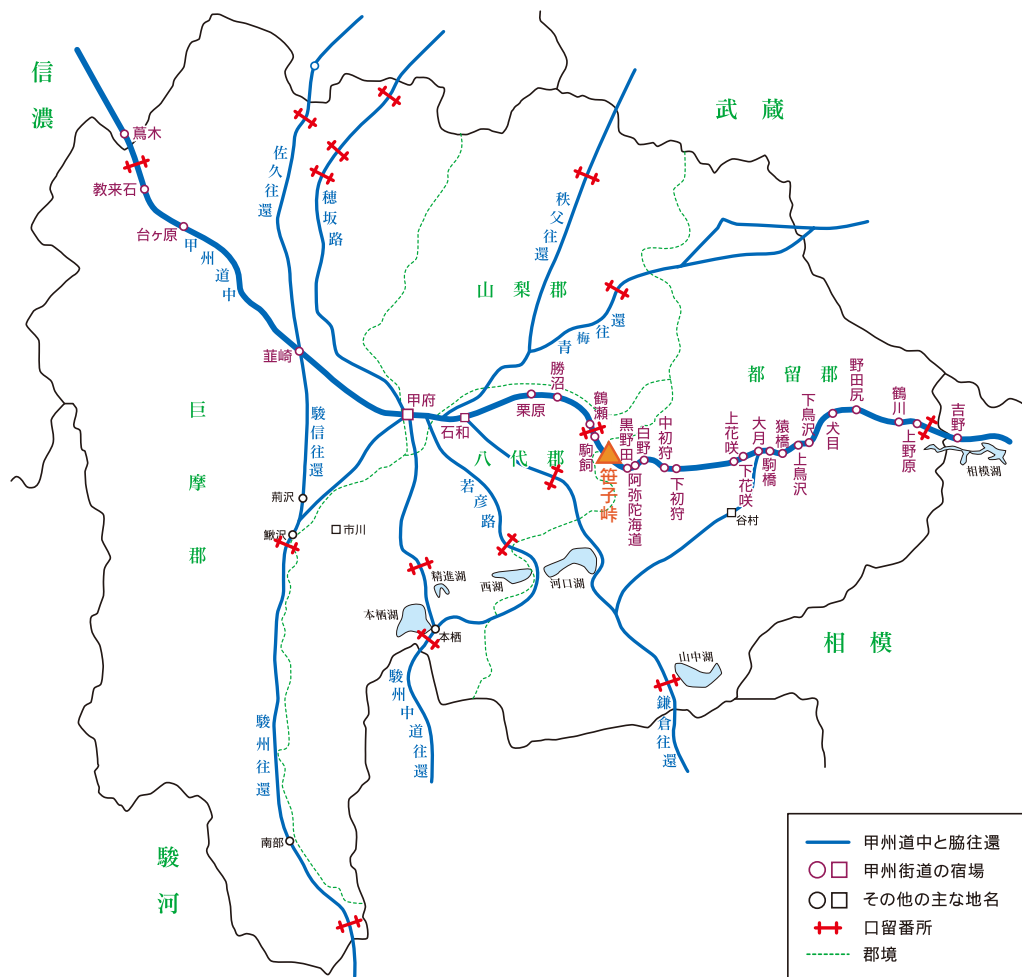
甲州道中の宿場 甲州道中に設けられた宿場は、日本橋から下諏訪までの間に44宿、甲斐国内には過半数の25宿があります。特に甲斐国東部、北都留郡域（当時は都留郡）に多くの宿があり、現在の上野原市内に4宿、大月市内は12宿と、大月だけで甲斐国内の宿場の半数近くを占めています。

難所笹子峠の名所 大月の西には、甲州道中最大の難所・笹子峠（標高1096メートル）があります。ここは険しい坂道が続く難所であるだけでなく、名所「矢立の杉」の所在地としても知られています。樹齢は千年以上といわれ、多くの武士が合戦に臨む際にこの木に矢を射かけて戦勝祈願をしたと伝えられます。高さは途中で折れているものの25メートルを超え、目通り幹囲は9メートルにおよぶ巨木で、葛飾北斎や二代歌川広重ら有名絵師たちも、その大きさを際立てて描いています。



▲「諸国名所百景 甲州矢立杉」 山梨県立博物館蔵
安政6年（1859）二代歌川広重画
二代広重の手による連作のひとつ。甲州道中笹子峠の矢立杉が題材となっており、大木を旅人が囲む様子が描かれています。初代広重没後7か月後より制作が始められ、二代広重襲名後間もない時期の作品となりました。

江戸時代の主な街道図



★資料のひとコト 甲府町方の役人が公務で旅行する際の行程です。

さきぶれじょう
先触状 甲州文庫 江戸時代

こうふきんぼん しはいたきがわとしやす
甲府勤番支配滝川利雍の配下が甲州道中の宿場に対して、甲府町年寄坂田氏が年始の挨拶を終えて江戸から甲府へ戻る際の移動に用いる人足・馬の数を事前に通知した文書。坂田氏は3泊4日の行程で、八王子・猿橋・勝沼に宿泊する予定となっている。

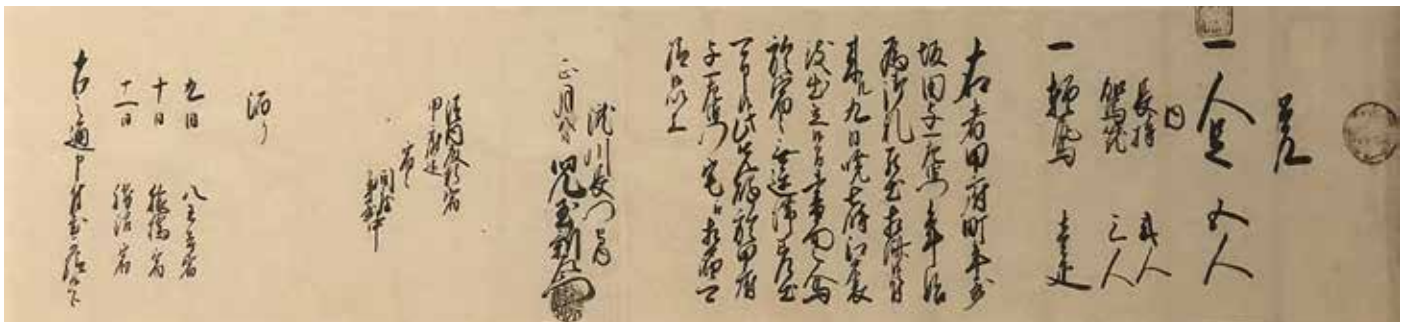
★資料のひとコト 台ヶ原は現在も宿場の風情が残る町のひとつです。

だい が ほらしきく
台ヶ原宿絵図 甲州文庫 寛政8年(1796)

台ヶ原宿(北杜市白州町)の責任者である問屋・年寄が提出した宿場の絵図。簡素ながら、こくいんち ほんじん こうきつば
橋などの公的施設が描かれており、宿場の基本的な構造がわかる。台ヶ原宿は甲州道中成立以前から交通の要地として機能しており、江戸時代後期には本陣と14軒の旅籠を中心に150軒余の家が並び、宿泊・輸送業務を担った。



▲ 近年の台ヶ原宿(北杜市)のようす 撮影 海老沼真治(当館学芸員)



▲ 先触状

【解説文】
覚
一、人足 五人
内
長持 式人
駕籠 三人
一、軽尻馬 壹疋
右者甲府町年寄
坂田与一左衛門年始
為御礼罷出、相済候二付、
来ル九日曉七時江戸表
致出立候間、書面之人馬
於宿々無遅滞差出
可申候、此先触於甲府
与一左衛門宅江相届可
給候、以上
瀧川長門守内
正月八日 児玉新左衛門(印)
從内藤新宿
甲府迄
宿々
問屋中
年寄
泊り
九日 八王寺宿
十日 猿橋宿
十一日 勝沼宿
右之通申付置可給候、以上



▲ 台ヶ原宿絵図(実物は彩色)

★資料の
ひとこと

江戸時代の最も精巧な道中絵図のひとつ

甲州道中分間延絵図

甲州道中分間延絵図（写本） 江戸時代（19世紀）か

文化3年（1806）、江戸幕府の道中奉行所が実地測量に基づき製作した「五街道分間延絵図」（重要文化財・東京国立博物館蔵）のうち、甲斐国内の甲州道中分を正確に模写したもの。上野原～中初狩、白野～一町田中、石和～竜王、韮崎～教来石の4巻からなる。（※前期 6/17～7/27・後期 7/29～9/7 で展示場面替え）



▲ 甲州道中分間延絵図（甲府中心部の拡大）
八日町と柳町を中心に市街地が発展し、二の堀によって城地と隔絶されている御城と甲府城下町の関係がよく分かる。

同 （石和宿付近の拡大） ▶
甲州道中が石和宿の西側で当時の笛吹川に遮断されており、同宿が甲府東方二里弱にして交通の要衝であったことが見て取れる。



▲ 甲州道中分間延絵図（甲府付近）

ステップ5 旅の思い出を残す



★資料のひとコト 名所だけでなく、甲州のさまざまな
文物を描いた貴重な記録です。

並山日記 (写本) 若尾資料 嘉永3年(1850) 成立
江戸時代の国学者黒川春村が、甲斐国に滞在した際に記した
絵入りの旅日記。甲州道中を通して甲斐に入り市川大門
に滞在、^{くろかわはるむら}身延山を経て東海道で江戸へ戻っている。
国内の寺社や旧家を巡り、宝物や祭礼などを丹念に調べて
記録している。(※前期・後期で展示場面替え)

★資料のひとコト 甲州のさまざまな名所が
詳細に描かれています。

甲中遊記 江戸時代(19世紀)
江戸から甲斐国までの旅程と、甲斐国内のさまざまな名所
などを遊覧した際の絵入りの記録。一部に、本草学者^{ほんぞうがくしゃしゅぶえ}渋江
長伯が文化6年(1809)に甲斐を訪れた際の紀行文『官遊
紀勝』と類似する描写がある。(※前期・後期で展示場面替え)

★資料のひとコト 仕事であっても、旅を楽しむことは忘れない。
そんなゆとりを持ちたいものです。

升屋の道中日記
甲州文庫 安政4年(1857)、明治3年(1870)
甲府八日町の菓子屋の^{ようかまち}大店、^{おおだな}升屋に関わる旅の記録。行程
や費用の内訳などを記している。升屋の江戸・東京への旅
は商売が主目的ではあるが、その際にも名所見物や社寺参
詣をしていたことがわかる。



近世甲斐国の書蹟

筆文字が書かれた掛け軸。こうした資料を書蹟（しよせき）（書跡）と呼びます。

ここでご紹介しているのは、江戸時代の甲斐国ゆかりの著名人たちの書蹟です。

文字を目の前になると、私たちはどうしても「何が書かれているのか」、「誰が書いたのか」、「どういう意味なのか」を気にしてしまいます。もちろんそれも大切なことですが、「どのように書かれたか」、つまり「書きぶり」を意識すると、奥深い書蹟の世界が見えてきます。

書蹟は、知人のお祝いなど、何かを記念して書かれることがあります。自作の詩や、過去の有名な作品の一部を書いて、他の誰でもない自分が贈ったもの、いわば自分の分身として渡します。書蹟を贈られた人は、書いてくれた人が筆をとっている姿を思い浮かべながら、その書蹟を見ているのです。

筆の運びを想像しながら、どのように書かれたのか、その勢いや柔らかさ、あるいは文字の並べ方など、「書きぶり」を想像してみましょう。次の一面に移るときに、筆を紙から離すのか、つけたままなのか、リズムはどうなのか、手を動かしながら想像してみましょう。内容や意味から離れて、文字そのものの「書きぶり」を味わえば、書蹟をより楽しく見ることができるようでしょう。



明治末期の加賀美光章の墓所（東宮〈大正天皇〉行啓写真より）

かいじあむ+のポイント！

幅広い学問に多くの師匠 一生続く師弟関係

学問の幅広さ 江戸時代、学問を修める際には、何人もの師匠について、様々な学問を幅広く学ぶことが普通でした。例えば加賀美光章は、神主の養子となったことから神道を学ぶために京都に出ますが、その他にも国学や儒学、和歌、有職故実、天文・暦学などをそれぞれの師匠に学んだのち、郷里に戻って私塾である環松亭を開きました。

師匠と弟子 光章には千人を超える弟子がいたといわれますが、その弟子たちの多くにも他に師匠がいました。光章の弟子のなかでも最も著名なのが山県大弼でしょう。大弼は光章のほかに五味釜川にも弟子入りし、儒学や医学などを学びました。また大弼が明和事件にて処罰されると、師匠である光章も処分されてしまいます。このように、師弟関係は一生の間続き、弟子に不行跡があると師匠もその責任を負い、弟子は師匠に頭が上がらないという、親分と子分のような関係を持っていました。

★資料の
ひとこと

深呼吸して、気分すっきり！

加賀美光章書蹟

甲州文庫 江戸時代（18世紀後半）

加賀美光章（1711-82）の書。光章は江戸小石川に生まれ、下小河原村（甲府市）の山王権現社（日吉神社）の養子となったのち、京都へ遊学し、神道や国学を修めた。甲斐に戻って環松亭という塾を開くと、千人を超える門弟を集めたという。本資料では「腹中の悪い気を吐き出し、清新の気を吸い込むと、何もないところから物事がわかるようになる」という意味の文言を記している。



■ 八宮良純法親王色紙

十八公采霜／後露一千年／色雪中深
（十八公の采は霜の後に露われ、
一千年の色は雪の中に深し）
われミても／久しく／なりぬ住／
よしの／きしの姫松／いく世へぬらん

■ 加賀美光章書蹟
吐納風／遠無物／露生／光章書
（風を吐納して、
遠く物無くして露を生ず）

■ 志村天目書蹟
積善有余慶／采枯立可須／天目源益之書
（善を積めば余慶有り、
采枯立ちどころに須つべし）

■ 辻孔夷書蹟
堪忍
辻孔夷篆

■ 小野通仙書蹟
與山石齊寿

■ 松井渙齋書蹟
花趣今朝拆／月當此夕圓、書樓明遠水、
入樹澹晴煙、榮操宜招隱、詩情似
花朝得月樓小集、賞、渙齋逸士濤、
花朝得月樓小集、賞、渙齋逸士濤、

■ 乙骨耐軒書蹟
得閑樓開軒書蹟
惟閑樓開軒書蹟
何當句勤時須有、郭好南阡陌不足、
乙骨耐軒書蹟
惟閑樓開軒書蹟
何當句勤時須有、郭好南阡陌不足、

■ 浅野長祚書蹟
雷公起臥龍、為國作霖雨、
飛電掣金蛇、其誰敢侮、
辛酉槐夏書於漱芳之閣
蔣潭蝦侶

★資料のひとこと

皇族らしい、線が細く、やわらかな筆さばき

八宮良純法親王色紙 甲州文庫 江戸時代（17世紀後半）

八宮良純法親王（1603-69）が、漢詩と和歌を書き付けたもの。良純法親王は、後陽成天皇の第8皇子。寛永20年（1643）、突如として甲斐国に配流され、湯村（甲府市）など国内を転々とした。万治2年（1659）には許されて帰洛し、寛文9年（1669）に67歳で亡くなった。漢詩は『和漢朗詠集』に収められた源順作のもの、和歌は『伊勢物語』から抜粋したもので、ともに松に例えて長寿を寿いでいる。

★資料のひとこと

印鑑でおなじみの篆書体は最も古い漢字のかたち

辻孔夷書蹟 甲州文庫 江戸時代（18世紀後半）

辻孔夷（生没年不詳）の書。孔夷は甲府三日町の二文字屋三枝家に生まれ、八日町の麻屋奥村家に養子に入った。五味釜川や加賀美光章の門弟となり、儒学や国学を修めた。能書家として知られている。本資料では「堪忍」の2文字を篆書体で記しており、一画一画を微妙なバランスで配置することで、画面を成立させているあたりに孔夷の力量がうかがえる。

★資料のひとこと

70歳おめでとう！ 長生きしてね

小野通仙書蹟 甲州文庫 天保13年（1842）

小野通仙（1804?-88）の書。通仙は浅尾新田村（北杜市）の医者の子に生まれ、甲府勤番医の宇佐美通義・久甫、伊豆の肥田春安の下で医術を学び、漢方と蘭方の折衷医術を身につけた。弟に画家の三枝雲岱、息子に医者的小野泉や英文学者の永峰秀樹がいる。本資料は70歳を迎えた知人に対し、「與山石齊寿」、山や石などと同じくらい長く生きてほしい、という五文字を与えたもの。

★資料のひとこと

一画一画が丁寧に書かれ、筆者の几帳面な性格がうかがえる

乙骨耐軒書蹟 甲州文庫 弘化2年（1845）

乙骨耐軒（1806-59）の書。耐軒は江戸に生まれ、幕臣乙骨家の養子となり、昌平坂学問所で学んだのち、同所の助教を務めた。天保14年（1843）、徴典館が再編整備された際、友野霞舟とともに学頭に就任し、甲府に赴任した。その後江戸に戻り、天守番などを務めたのち、54歳で亡くなった。本資料は耐軒が数えて40歳のときの作であり、春の月夜に望楼から周囲を見渡した風景を詠んでいる。

★資料のひとこと

くずし字のお手本のように 整っていないが勢いのある書

浅野長祚書蹟 甲州文庫 文久元年（1861）

浅野長祚（1816-80）の書。長祚は上級旗本の家に生まれ、書を杉浦西涯らに学んだ。天保13年（1842）に甲府勤番支配に就任し、翌年には徴典館の再編整備をおこなって、乙骨耐軒らを教授として招いた。江戸に戻ってから要職を歴任したのち、慶応3年（1867）に隠居した。本資料は元の趙孟頫の「天冠山題詠詩」のうち「雷公岩」という漢詩の一部で、激しい雷雨の情景を詠んだもの。

★資料のひとこと

勢いがあり、鑑賞性が高い すぐれた書蹟

志村天目書蹟 甲州文庫 江戸時代

（18世紀後半） 志村天目（1746-1817）の書。天目は八代郡末木村（笛吹市）に生まれ、加賀美光章に学んだ。江戸に出て手島堵庵に心学を学び、郷里に戻って心学を講じた。本資料に書かれているのは、『文選』に収められた魏の曹植による「贈丁廙」という漢詩の一部で、「善行をなせば見返りとして必ず良いことがあり、栄えたり廃れたりとはたちまちに入れ替わる」という意味である。

★資料のひとこと

花が咲き、月が照らし、思わず詩作にふけてしまう夜の情景

松井渙齋書蹟 甲州文庫 江戸時代

（19世紀半ば） 松井渙齋（1806-54）の書。渙齋は江戸の旗本の家に生まれ、高室村（甲府市）に移住し、西花輪村（中央市）の時習館で教鞭をとった。その後西野村（南アルプス市）に松聲堂が開かれると初代教授となった。門人に広瀬元恭や小野泉などがいる。本資料では夜の庵で詩情にあふれるなかで、酒を飲みながら歌う、という隠者の理想の姿が詠まれている。

山梨流 災いの防ぎ方

山梨県内では、小正月を中心^{こしょうがつ}に道祖神祭り^{どうそじんまつ}が行われています。道祖神は村境に祀^{まつ}られ、災いを塞^{ふさ}ぎ止める神とされています。

道祖神には、厄病神^{やびょうがみ}と関連づける伝承があります。例えば、厄病神が道祖神を訪れ、厄を授^{さず}ける人を記した帳面を預けていくという伝承は山梨県内でも見られ、祭りの時に帳面を飾る習俗^{しゅうぞく}も伝えられています。道祖神とともに疱瘡神^{ほうそう}（天然痘^{てんねんとう}を流行させる神）を祀る例もあります。市川三郷町黒沢大木^{いちかわみさちょうくろさわおき}では石造物の疱瘡神を祀り、道祖神祭りではその神殿も作ります。道祖神と厄病神とは相反するようでありながら、実は強く結びついているのです。このような性格は、古くは11世紀の『本朝法華験記^{ほんちようほっけげんき}』に見られ、老人の道祖神が厄神^{しえき}に使役される存在^{あらわ}として著^{あらわ}されています。

このほか、祭りを止めると火事になる、災いを招くという伝承も見られます。道祖神は村を守るだけでなく、扱^あいによっては災厄を起^{おこ}す厳しく恐ろしい一面も持つと考えられていたようです。

災厄をくい止めるために、山梨の人々は荒ぶる神を境界に祀り続けてきました。年中行事として受け継いできた先人たちの想いは、今の私たちだからこそ実感を持って受け止めることができるのではないのでしょうか。

やまなしの
道祖神祭り

～災いを防ぐ方法～

(8分45秒)

やまなしの道祖神祭り

～災いを防ぐ方法～ (8分45秒)

県内の道祖神祭りを豊富な写真と解説で紹介するスライドショー。オコヤのとなりで上映中。



▲ 展示室に存在感を示すオコヤ

★資料の
ひとこと

村に災いが入らないのは、
道祖神のおかげです。

山梨市市川地区のオコヤ^{いちがわ}

製作者 山梨市市川 第三班のみなさん

製作年 平成 17 年 (2005)

市川地区では小正月の道祖神祭りの時、集落内の道の分岐点にオコヤ（お小屋）を立てている。市川には、道祖神と厄神の伝承がある。それによれば、道祖神祭りの前に厄神がオコヤの前を通りかかる。道祖神は正面の窓から手を出して厄神を捕まえ、そのまま閉じ込め、ドンドンヤキの火で一緒に焼いてしまうのだという。

★資料の
ひとこと

道祖神祭りは
続けなければなりません…!

「道祖神祭礼再開願」

馬場組（現在の山梨市牧丘町西保下馬場）

天保 11 年 (1840)

若者たちが道祖神祭りを華美におこなったことから、7 年間にわたり道祖神祭りの実施を禁止されていた馬場組が、祭りの再開を願い出たものである。道祖神祭りが多くの村でおこなわれていたことや、祭りの中断が災いを招くと考えられていたことがわかる。道祖神は村を守るだけではなく、祀らない者に災厄をもたらすという荒ぶる神の側面も持ち合わせている。

【道祖神祭礼再開願】の読み下し文】

恐れ乍書付を以て御愁訴申し上げ奉り候

山梨郡西保下村上組の内馬場組、百姓三右衛門ほか貳拾人惣代喜左衛門・安兵衛、申し上げ奉り候、私ども組の内道祖神祭礼の儀、去ル天保四巳年以來御差留めに相成り相慎み罷り在り候処、道祖神祭礼の儀は、一國中の儀、当御領地内にも相止め罷り在り候は、私村方に限り、右は不吉を相招き候様に相心得、神慮にも相叶い申さざる哉と一同心痛仕り候間、恐も顧みず御愁訴申し上げ奉り候、何卒、格別の御慈悲を以て、幼年のものどもに成とも質素に祭礼執行相成り候様、仰せ付けられ下し置かれ度、願い上げ奉り候、右願の趣、御聞濟し成下し置かれ候はば、広太の御仁恵と有り難き仕合わせに存じ奉り候、以上

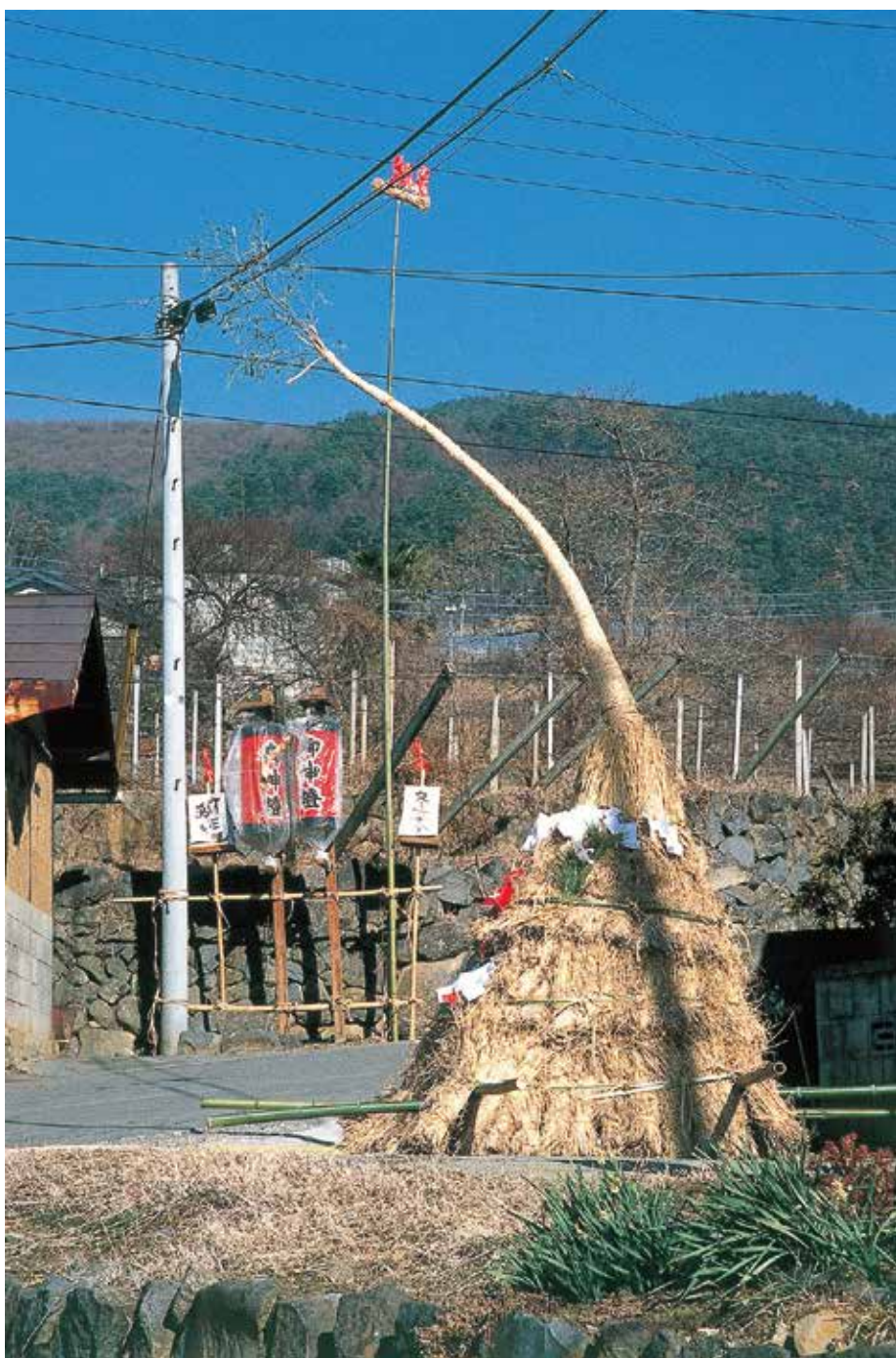
子正月十五日

山梨郡西保下村上組の内 馬場組百姓三右衛門ほか二十人惣代 喜左衛門

同断 安兵衛

右差添人名主 伝左衛門

八幡御役所



危機のなかの山梨

私たちは、新型コロナウイルスの感染拡大という危機を経験しつつありますが、よく参考とされる約100年前のスペイン風邪の際には、数次の流行の波がやってくるなかで山梨県民の約半数が罹患し、数千人の死者が出るという被害を受けました。

近代以前には、いまだ克服されていない結核をはじめ、天然痘、コレラ、赤痢などさまざまな感染症が社会の脅威となっており、山梨県には日本住血吸虫症（地方病）とのたたかいもあり、人々はたびたび広がる疾病に対して、常に立ち向かっていたのだといえるでしょう。

疾病以外にも、自然豊かな山梨県には自然にまつわる災害も多く、近世以前には富士山の噴火があり、通史的には大きな水害がたびたび発生し、多くの生命財産が失われています。昭和41年（1966）の台風26号に関わる災害（死者・行方不明170名超）以後、山梨県では数十名以上が犠牲となる自然災害は発生しておらず、地域的な記憶や知見が薄らいでいることが危惧されます。

山梨県を襲った大きな地震は、嘉永7年（1854）の安政東海・南海地震までさかのぼります。災害と対応する人々の記録は、私たちが直面したときに頼りとなる有用なデータとなります。危機のなかの山梨で、どのような取り組みがあったのか、みなさんのお住まいの地域に引き付けて考えてみてはいかがでしょうか。



▲ 水に浸かる甲府市泉町（現在の相生・丸の内地区）の様子
展示室に設置された水害写真の大型グラフィック（高さ3メートル） ▶
明治43年（1910）の大水害の甲府市内の被災状況を物語る写真。写真に書き込まれた日付は8月13日で、10日深夜にあふれた荒川の水が、2日あまり経ってなお、通りをゆく人々の足下を洗っている様子がわかる。

かいじあむ^{ふらす}のポイント！

地震で改元（嘉永↓安政）

甲州も大被害を受けた東海地震

安政東海・南海地震の被害 嘉永7年（1854）11月4日に安政

東海地震が、その翌日に安政南海地震が発生します。いわゆる南海ト

ラフ地震で、山梨でも震度6から7程度の揺れに見舞われ、しばらく

余震が続いたとされます。当時の資料をみると、甲府から南方にかけ

て家屋倒壊がはなはだしく、市街地でもお湯や水が湧きでて、郊外で

は液状化、川の近くでの地盤沈下などが記録されています。

★資料の ひとこと

甲州の古い地震の記録を載せた、
数少ない貴重な資料です。

さいうんろく
歳云録

若尾資料 大正6年（1917）写

江戸時代の見聞録として、甲州における安政東海・南海地震の被災状況を記しているほか、それ以前の元禄・宝永・天明の地震についても、被害に関する伝承が記録されている。資料標題には「抄」と付けられており、若尾家による県志編纂事業でおこなわれた資料調査で作成された部分的な写しと思われる。

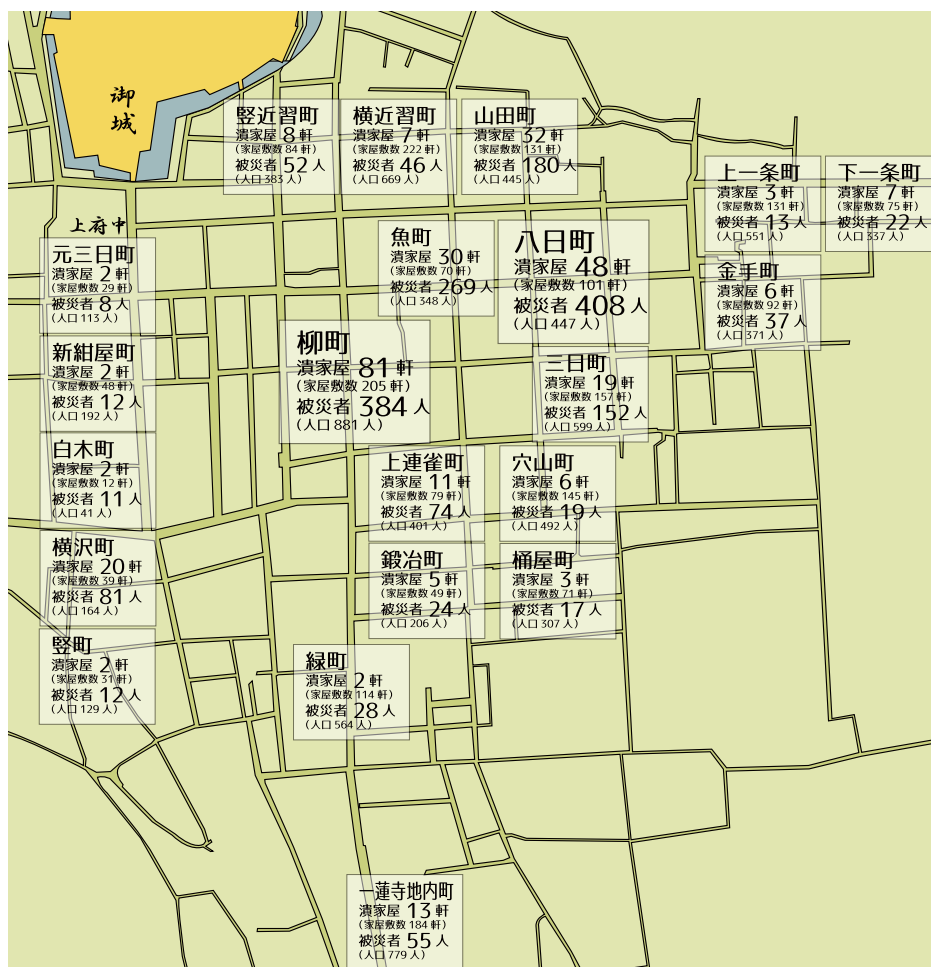
★資料の ひとこと

甲府盆地の南西方向に
被害が集中して起きています。

甲府大地震之記 甲州文庫 安政元年（1854）

嘉永7年（1854）11月4日・5日に立て続けに発生した安政東海・南海地震の際の、甲府をはじめとした甲州各地の被災状況の記録。続く余震や多数の倒壊家屋、お湯や水、泥水の湧出、「ゆり込み」と呼ばれる地盤沈下など、さまざまな被害が記録されており、今後南海トラフ巨大地震が発災した場合の本県の災害の方向性を見ることができる。

安政東海地震の際の甲府城下町



甲府大地震之記の記述の一部分

甲府地震之覚

一 嘉永七年寅十一月四日朝五ツ時大地震、市中一統大騒動、潰れ家潰土蔵数多有之、別而八日町老丁目魚町式丁目三丁目柳町式丁目三丁目大損之建家者勿論土蔵等ハ無事成者老つも無之前代未聞之大変二候、右同日夜迄二三拾六度斗りも震申候、翌五日も同様夕申ノ下刻又々余程之大地震、(続く)

「甲府大地震之記」より作成



▲「危機のなかの山梨」展示ケース内

★資料のひとコト 常設展示パート1の「共生する社会」に関連する映像があります。

26号台風災害記録アルバム 昭和41年(1966)

山梨県に戦後最大の被害者(全県下で死者・行方不明者が昭和34年の台風7号の90名を大きく上回る175名に達した)をもたらした、昭和41年9月の台風26号による被災状況を撮影したアルバム。来年で災害後50年を迎えるが、集中豪雨が増加している今日であればこそ、災害の実態を振り返るべきときではないだろうか。



▲土石流で壊滅的被害を受けた足和田町根場地区(富士河口湖町)

★資料のひとコト 大変な脅威が近づいているとき、心にも効く処方箋が必要です。

疫病除守札

えきびょうよけまもりふだ

甲州文庫 江戸時代

安政5年(1858)のコレラや天然痘など、流行病感染拡大期に多く出回った守り札。多くの民間療法的な予防法がみられたように、原因が定かではない病に対して、人々は藁をもすがる思いで守護を求めたのではないかな。



かいじあむ^{ふらす}のポイント！

人々に立ち^{ふらす}はだかつたさまざまな感染症

多くの伝染病 人類の脅威^{きょうい}となる数々の感染症ですが、かつては「伝染病」との呼ばれ方が一般的だったと思われます。わが国でも近世から近代にかけては天然痘やコレラの大流行がありました^{てんねんとう}が、種痘の普及で天然痘が大きく減少した一方で、明治時代に顕著な被害を出した伝染病に赤痢があります。山梨県における赤痢は、明治30・31年(1897・98)の流行が大きく、山梨県だけで両年とも2千名を超える死者をだしました。この明治30年には伝染病予防法が制定され、こうした疾病に対する防疫がおこなわれるようになりました。

山梨における「スペインかぜ」 今回の新型コロナウイルス禍のなかでよく触れられる100年前の「スペインかぜ」ですが、これは毒性の強いインフルエンザウイルスで、全世界で2千5百万人、わが国だけでも約38万人が死亡しています。山梨県では全体で約25万人がかかり、大正7年(1918)から翌年春にかけての第一波の流行で約2800人、同8年から9年にかけての第二波の流行で約2200人が亡くなりました。当時の山梨県の人口が約58万人なので、半分以上の人が発症し、およそ100人にひとりが亡くなった計算になります。

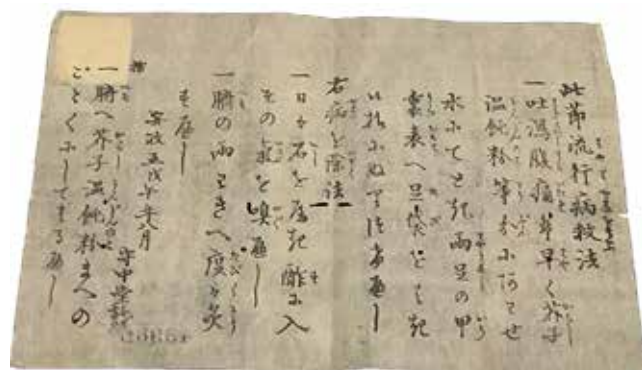
地方病から現在 山梨県においては日本住血吸虫症(地方病)の流行もあり、大正時代の県の報告書には、地方病は結核に次ぐ死者を出していると記されています。山梨県は長いたたかいの末に、この病気の流行を終息に漕ぎつけましたが、言わば感染症(伝染病)と長く関わり、それを止めることができた歴史とノウハウを持つめずらしい自治体とも言えます。感染症の脅威にさらされる今日、いまなびが出来るのか、実は身近な山梨の歴史にそのヒントがあるのかもしれない。

★資料のひとコト ヨゲンノトリが出現したとされるのもこのコレラの流行時です。

このせつは、やりやむくうほう

此節流行病救法 甲州文庫 安政5年(1858)

安政5年のコレラ流行時に流布した予防・対処方法を記したものの。内容はカラシとうどん粉を練ったものを貼るとか、へその両脇にお灸を据えるとか、現在から考えれば非科学的なものばかりだが、これらの民間療法的なものは全国的にみられ、多くの人々が原因の分からない流行病の脅威に対して、切実な対応をしていたことがうかがえる。



▲ 此節流行病救法

★資料のひとコト 100年後には貴重な資料になっているかもしれません。

政府配付の布製マスク 令和2年(2020)

令和2年(2020)の新型コロナウイルスの感染拡大のなかで、政府から全戸配付がおこなわれている布製マスク。マスクの流通量不足に対応するため、洗って再使用が可能な布製マスクを、1住所あたり2枚を配付することが同年4月に決定した。



▲ 死体解剖御願

★資料のひとコト 山梨にも感染症に長く取り組んできた歴史と努力の積み重ねがあります。

死体解剖御願 寄託資料 明治30年(1897)

明治時代の日本住血吸虫症(地方病)患者の献体願。西山梨郡清田村(甲府市)の女性が、原因が解明されていなかった同症の原因特定のため、自らの死後の病理解剖を願ひ出たもの。彼女の遺志もあり、原因である日本住血吸虫は明治37年(1904)に発見されるが、甲府盆地一帯に蔓延したこの疾病の流行終息が宣言されたのは、平成8年(1996)2月のことである。

死体解剖御願 解読文

死体解剖御願

西山梨郡清田村

(番地・姓名など略)

当五拾四年

私義泰平ナル御代ニ生存スルコト既ニ数十星霜ヲ経過スルモ、素ヨリ無教育ナルヲ以テ、未ダ嘗テ君恩ノ万分ノ一ダモ報ゼザルニ、一朝病痾ノ為メ不帰ノ身トナランニハ迷惑至極ト存候、然ルニ不幸ニモ昨明治二十九年六月頃ヨリ一疾病ニ罹リ悩む^{こと}甚タシ、依テ早速ニ某醫^イヲ迎ヘ診ヲ乞ヒタルニ、病名サヘ指示セザルヲ以テ、其后又二三ノ某醫ニ診ヲ乞ヒタルニ、是亦前同様漠トシテ一ツモ其要領ヲ得ス、遂ニ荏苒時日ヲ経過シ、同年十二月ニ至ルニ病勢ハ漸々増進スルノミニシテ毫モ減退セサル故、最后諦メノ為メ同月下旬貴院ノ温厚篤実ナル御診察ヲ仰ギ、充分ナル御鑑定ヲ得タルニ、豈図ランヤ当地近傍有名ナル地方病ニシテ、未タ病源ノ発見セサル最モ恐ルベキ疾患ナリ、是迄数多ノ該患者発見スルモ、病源不明ノ為メ十中八九ハ鬼籍ニ転スルノ不幸ニ接シタリト、妾事モ発病臥床以来最早始ト一ケ年間ノ久敷ニ及ブモ、素ヨリ病源不明不治ノ症ナルヲ以テ、如何ニ先生ノ百方御尽力且御治療ヲ受クルモ、日々衰弱ヲ増進スルノミニシテ到底快復ノ見込無之ハ勿論、不日死亡ノ不幸ニ陥ルハ目前ナルヲ以テ、死後は是非共貴院ニ於テ解剖被成下、充分病源御発見セラレ、以后該地方病ニ罹リ悩ム処ノ数多諸氏ヲ助ケ、醫學上永遠ニ妾ノ寸志ヲ遺保セラレン^て懇願ノ至リニ候、依テ本日ヲ以テ戸主正夫并ニ親属^族立会連署ノ上御願申置候也

右戸主

明治三十年五月三十日 略(印)

(家族・本人・親属2名署名捺印略)

東山梨郡岡部村

保順病院

御中

毎日に微笑みを

昔から、疫病などのさまざまな災厄により、人々は繰り返し苦しめられてきました。現在のように科学的に物事が考えられていなかった時代、人々が救いを求めたのは信仰でした。病の流行に救いを求め、日照りが続けば雨を乞う。その祈りの先にあったのは神仏であり、なかでも観音菩薩はこの世でのさまざまな災厄を除くものとして、とりわけ多くの信仰を集めてきました。仏・菩薩に性別は無いとされますが、観音菩薩は優しい女性のような姿に作られることが多く、何より穏やかに笑みを浮かべたような表情は、拝む者の心を落ち着かせ、たとえどんなに困難な状況でも最善を尽くそうという、前向きな気持ちを励まし続けてきたのかもしれない。

ここ数か月、新型コロナウイルス感染症のために、外出を自粛するなど気分がふさがちな生活を送っておられる方も多いでしょう。そのような時でも、目の前にある仏の表情はどこまでも優しく穏やかです。現代において、科学技術は私たちをあるゆる面でサポートしてくれるようになりました。

しかし私たちの心は、現代においても昔と変わらず、優しい菩薩の微笑みにこそ救われているのかもしれない。

★資料の
ひとこと

この像は1本の桜の木からできている。
素材まで気持ちを明るくしてくれる。

観音菩薩立像

安楽寺蔵 笛吹市指定文化財 平安時代(10～11世紀)

観音菩薩は、“現世利益”、この世を生きる私たちの願いを叶えてくれる尊像とされ、昔から多くの信仰を集めてきた。この像は、スラッと背が高く痩せ型だが、顔は少々下膨れでふっくらとしており、穏やかな表情を浮かべる。よく見ると、耳たぶの厚い立派な耳をしており、私たちの願い事にも、きっと耳を傾けてくれるのではないだろうか。

かいじあむ^{ぷらす}のポイント！

山梨の自然と人

「常設展示パート1」へのご案内 常設展拡大展示「かいじあむ^{ぷらす}」をご覧ください。いつもとは異なる切り口での展示となりましたが、お楽しみいただけましたでしょうか。あわせて、常設展示室（パート1）もぜひご覧ください。新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、一部の展示を休止しておりますが、選りすぐりの資料が皆様をお待ちしております。

メインテーマ「山梨の自然と人」 山梨県立博物館の展示は、「山梨の自然と人」を基本テーマに、人々の暮らしや他地域との交流など、山梨の歴史と風土について詳しく紹介しています。今回の「かいじあむ^{ぷらす}」は、この、メインテーマや常設展示を中心として、開館から15年間活動して来た積み重ねの成果ともいえるのではないかと思います。いつもの展示も今回の「かいじあむ^{ぷらす}」も、そしていずれ開催されていく企画展・特別展・シンボル展も含めて、山梨の魅力をこれからも「もっともっと！」お楽しみください。



甲府盆地と富士山 撮影 西願麻以（当館学芸員）

展示資料リスト (番号に○は当館初展示資料)

導入展示 御坂のニホンオオカミ

資料名	時代	数量	製作者等	所蔵	文化財指定
1 ニホンオオカミ頭骨	江戸時代か	1		山梨県立博物館	文化財指定

その① いのちの歴史との対話―山梨県立博物館の自然史資料―

資料名	時代	数量	製作者等	所蔵	文化財指定
② フクロウ本剥製	現代	1		個人	文化財指定
③ リニア高川トンネル 産出新第三紀化石	新第三紀中新世後期 (約700万年前)	6		山梨県立博物館	山梨県

その② 文化のはじまり―館蔵考古関係資料から―

資料名	時代	数量	製作者等	所蔵	文化財指定
④ 深鉢型土器、釣手土器	縄文時代中期	3	寧前七王 濤	山梨県立博物館	
⑤ 土偶	縄文時代中期	3	寧前七王 濤	山梨県立博物館	
⑥ 八代郡岡村鉢子塚出土土鏡拓本	江戸時代(18世紀)	1	立石遺跡	山梨県立博物館	
⑦ 東八代郡代村谷白土墳発見記録	明治22年(1889)	1		山梨県立博物館	
⑧ 埴輪	古墳時代(6世紀)	9	加牟那塚古墳	山梨県立博物館	
⑨ 甲斐型土器 坏	平安時代(9世紀)	6	寧前七王 濤	山梨県立博物館	
⑩ 甲斐型土器 皿	平安時代(9世紀)	4	旧甲府市(旧府市)出土	山梨県立博物館	
⑪ 「布カ」墨書土器	平安時代(10世紀)	1	旧長瀬村(富士河川湖町)釜淵出土	山梨県立博物館	

その③ 山梨の宝 甲州文庫

資料名	時代	数量	製作者等	所蔵	文化財指定
12 懷宝甲斐国絵図	天保13年(1842)	1		甲州文庫(当館蔵)	
⑬ 富突き錐・木札	江戸時代	1		甲州文庫(当館蔵)	
⑭ 功刀亀内肖像写真	昭和時代か	1		甲州文庫(当館蔵)	
15 甲州文庫扁額	昭和5年(1930)	1	中村不折筆	甲州文庫(当館蔵)	
16 甲州柙各種	江戸時代	4		甲州文庫(当館蔵)	

その④ 絵画から見えるもの―大木家伝来の襖と浮世絵に見る厄災―

資料名	時代	数量	製作者等	所蔵	文化財指定
17 峡中広告集	江戸・明治時代	1		甲州文庫(当館蔵)	文化財指定
18 甲斐国水晶眼鏡	明治13年(1880)	1		甲州文庫(当館蔵)	
⑬ 甲州文庫移管関係綴	昭和26年(1951)	1		甲州文庫(当館蔵)	
⑭ 甲州文庫関係記事集帖	昭和時代	1		甲州文庫(当館蔵)	
⑮ 甲州文庫図書目録	昭和18年(1943)	2		甲州文庫(当館蔵)	
⑯ 同	同 26年(1951)	1		甲州文庫(当館蔵)	

その⑤ エア甲州道中旅行

資料名	時代	数量	製作者等	所蔵	文化財指定
22 高林古翠図	明治5年(1872)	1	中丸精十郎	大木コレクション(当館蔵)	文化財指定
23 菓子袋(升太の広告集)【前期】	江戸時代	1	歌川国芳	甲州文庫(当館蔵)	
⑮ 菓子袋(升太の広告集)【後期】	江戸時代	1	歌川国芳	甲州文庫(当館蔵)	
⑯ 妙旨斐徳本麻疹之来記【前期】	文久2年(1862)	1	歌川芳藤	甲州文庫(当館蔵)	
⑰ 御菓子袋【後期】	江戸時代	1		上野晴氏収集資料(当館蔵)	
⑱ 麻疹送出シの図【前期】	文久2年(1862)	1	歌川芳藤	三枝家資料(当館蔵)	
⑲ 地震後野宿の圖【後期】	安政2年(1855)以降	1		三枝家資料(当館蔵)	
⑳ 流行職人尽【前期】	安政2年(1855)以降	1		三枝家資料(当館蔵)	
㉑ 鯨の流しもの【後期】	安政2年(1855)以降	1		三枝家資料(当館蔵)	
㉒ 治る御代 ひやかし鯨【前期】	安政2年(1855)以降	1		三枝家資料(当館蔵)	
㉓ 鯨絵【後期】	安政2年(1855)以降	1		三枝家資料(当館蔵)	

資料名	時代	数量	製作者等	所蔵	文化財指定
28 東海道・中山道行程早見表	文政13年(1830)	1		甲州文庫(当館蔵)	
29 甲州街道	天保7年(1836)	1		甲州文庫(当館蔵)	
30 甲州道中細見記	嘉永4年(1851)	1		甲州文庫(当館蔵)	
31 諸国道中商人鑑	文政10年(1827)	1		甲州文庫(当館蔵)	
⑳ 関所通行手形	慶応4年(1868)	1		甲州文庫(当館蔵)	
㉑ 先触状	江戸時代	1		甲州文庫(当館蔵)	
㉒ 台ヶ原宿絵図	寛政8年(1796)	1		甲州文庫(当館蔵)	
㉓ 甲州道中分間延絵図(写本)	江戸時代(19世紀か)	1		山梨県立博物館	
36 並山日記(写本)	嘉永3年(1850)成立	1		若尾資料(当館蔵)	

	資料名	時代	数量	製作者等	所蔵	文化財指定
37	甲中遊記	江戸時代（19世紀）	1		山梨県立博物館	
38	升屋の道中日記	安政4年（1857）、明治3年（1870）	1		甲州文庫（当館蔵）	

その⑥ 近世甲斐国の書蹟

	資料名	時代	数量	製作者等	所蔵	文化財指定
39	加賀美光章書蹟	江戸時代（18世紀後半）	1		甲州文庫（当館蔵）	
40	八宮良純法親王色紙	江戸時代（17世紀後半）	1		甲州文庫（当館蔵）	
41	志村天目書蹟	江戸時代（18世紀後半）	1		甲州文庫（当館蔵）	
42	辻孔夷書蹟	江戸時代（18世紀後半）	1		甲州文庫（当館蔵）	
43	小野通仙書蹟	天保13年（1842）	1		甲州文庫（当館蔵）	
44	松井渙斎書蹟	江戸時代（19世紀半ば）	1		甲州文庫（当館蔵）	
45	乙骨耐軒書蹟	弘化2年（1846）	1		甲州文庫（当館蔵）	
46	浅野長祚書蹟	文久元年（1861）	1		甲州文庫（当館蔵）	

その⑦ 山梨流 災いの防ぎ方

	資料名	時代	数量	製作者等	所蔵	文化財指定
47	山梨市市川地区のオコヤ	平成17年（2005）	1	山梨市市川第三班のみなさん	山梨県立博物館	
48	「道祖神祭礼再開願」	天保11年（1840）	1	馬場組（現在の山梨市牧丘町西保下馬場）	山梨県立博物館	

その⑧ 危機のなかの山梨

	資料名	時代	数量	製作者等	所蔵	文化財指定
49	歳云録	大正6年（1917）写	1		若尾資料（当館蔵）	
50	甲府大地震之記	安政元年（1854）	1		甲州文庫（当館蔵）	
51	26号台風災害記録アルバム	昭和41年（1966）	1		山梨県立博物館	
52	疫病除守札	江戸時代	1		甲州文庫（当館蔵）	
53	此節流行病救法	安政5年（1858）	1		甲州文庫（当館蔵）	
54	政府配付の布製マスク	令和2年（2020）	1	個人		
55	死体解剖御願	明治30年（1897）	1	個人（寄託）		

その⑨ 毎日に微笑みを

56	資料名	時代	数量	製作者等	所蔵	文化財指定
	観音菩薩立像	平安時代（10～11世紀）	1		安楽寺	文化財指定 笛吹市

山梨県立博物館 拡大常設展示

かいじあむ十(ぷらす) 展示解説リーフレット

令和2年7月18日 発行

編集・発行 山梨県立博物館

電話 055-261-2631
〒406-0801 山梨県笛吹市御坂町成田1501-1

無断転載・複製を禁じます。
非売品



山梨県立博物館
Yamanashi Prefectural Museum





山梨県立博物館
Yamanashi Prefectural Museum